郷土史見て歩き

楢原地区

楢原は川口地区の最東端に位置し、北は川口川で犬目と境し、南は北浅川、東は西中野とそして西は高尾橋を南へ下る里道で川口と接しています。『皇国地誌』によれば「本村古昔ハ川口郷内ノ原野ニシテ、各処に楢樹アリシヨリ村名起ルト云フ……」と記されていますが、楢原のナラは平らを意味するナラでもあるようです。楢樹も繁茂していたかも知れませんが、平たいゆるやかな原野であったためにこのような地名になったと思われます。

北の境の川口川は昭和二十四年～二十七年にかけての川口川改修により、蛇行していた川を直線的に直したため、現在では若干飛び地が残っています。旧河川のあとは、今では遊歩道として多摩第一老人ホームの北側などにはっきり残されています。

楢原には十三の小字名があり、地番の順に楢原、鹿島、一本松、花ノ木、中原、幸神、唐松、山王林、佐貫、荒井、神明、前川原、松枝、の名が残っています。

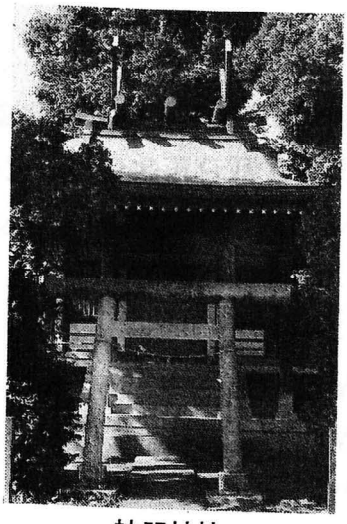
多摩の傑僧・卜山（舜悦）禅師がこの地楢原で生まれ、十三歳で修業に旅立つまでここで育ったと、古くから伝えられています。このことを地元の人々は誇りに思っています。

さて楢原の神社、庵（楢原には現在、寺が一つもない）、名所、史跡、各施設等を見て歩き的に紹介してゆくことにします。

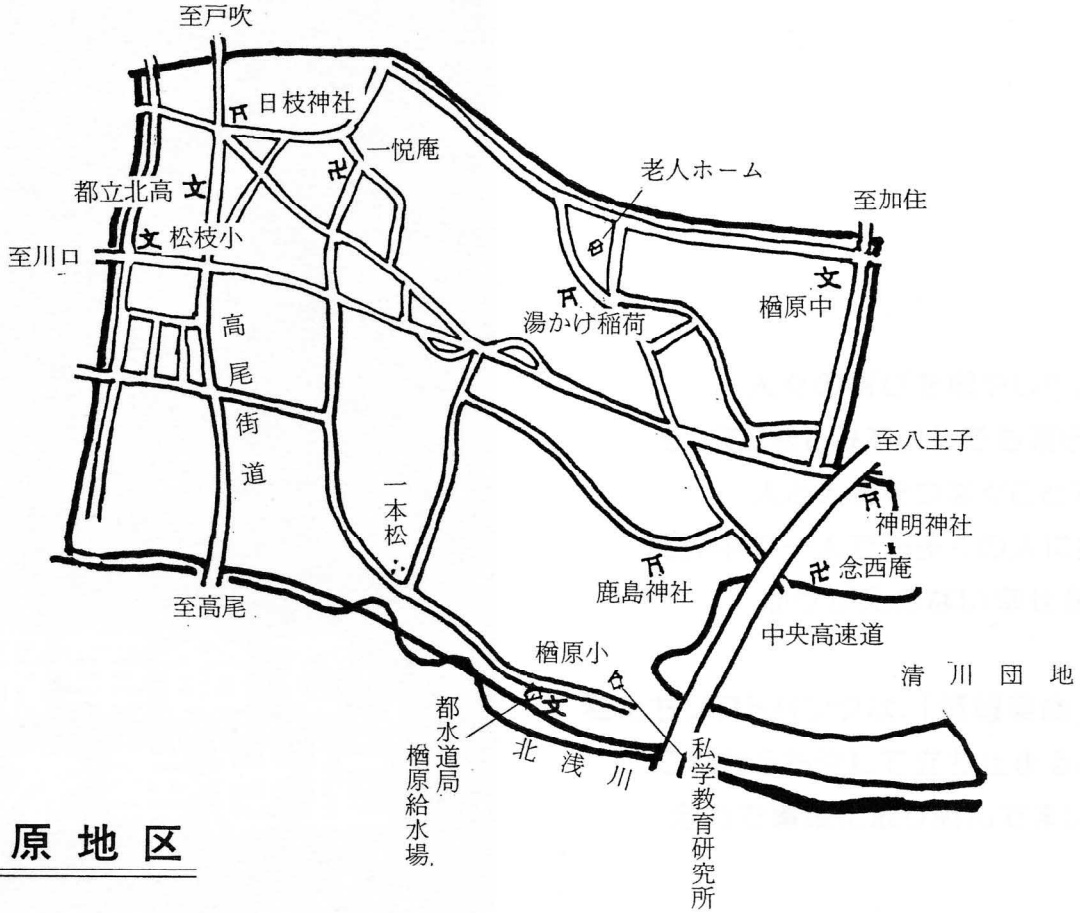
俗にいう楢原七社から見てゆきましょう。

神明神社（楢原二一一）

楢原の最も東側にある神社であり、創立年代は不詳ながら、延宝丙辰年当村中村七左衛門が再建、其の後明治九年二月橋本義篤起元となりて改築す、と記録されています。現在の社殿は昭和四十六年に造営されました。当時の金で八百万円、とは小川忠行さんの話です。銅葺きの神明造りの立派な社です。祭神は田心姫命、満津命、市杵島姫命といわれています。社殿に向かって右側奥に境内末社の稲荷神社がありますが由緒、創立年月は不詳です。なお昭和四十六年造営時に神明社から神明神社に昇格させるため、後記の念西庵跡の楢原倶楽部（お能の松にちなんでか地元では松の木会館とも呼ばれる）を同社の社務所としています。祭例は九月最終日曜日です。



神明神社



楢原地区

鹿島神社（楢原二七三）

神社前バス停の八王子農協楢原支店の横を南に入り、中央高速手前を右に折れればすぐ鹿島神社の森が見えてきます。楢原全体の村社であり広々とした境内に鎮座している社は風格があります。明細帖によれば祭神は武甕槌神（武勇の神様）となっています。そのためでしょうか、日露戦争当時の戦勝を記念しての奉納額が拝殿の棟に挙げられています。出征し凱旋した兵士八名の名前が刻まれています。当時小国の日本が大国のロシアに大勝し、国中が沸き立っていた頃、この地楢原でも大さわぎだったのでしょう。拝殿裏手には大相撲の番付額が奉納されていますが、これも武勇の神に誰かが祈願したのでしょうか。

鹿島神社の由緒としては明細帖に「寛永廿一年甲申年九月吉祥日、鹿島神社殿造立す。武劦多西郡楢原村供養導師西蓮寺神主小河六平と其の当時の棟札今に存在す。右寛永年間に至り鹿島社大破に及び神主小河六平発起して社宇改造し楢原村の鎮守とせしものなり。其証寛永廿一年の棟札の裏面文中に遷宮す。殊に当所鎮守と顕わし社塔久退する所施主無比の担願発し新社造立す。辰に遷宮儀式執行すと。記載有之。往古より社宇建立し有名なり。殊に今氏子の言によれば永承年間将軍源頼義臣下広綱と云う者に命じて当社を創立すと古書にありと云う。当村橋本義篤宅へ秘蔵し置きし処火災の際竟に古書類焼失し可惜哉其の実を失せりと云う。」と記されています。

現在の社殿は明治七年に改築されたもので、社殿は権現造りで左

手に神楽殿を配した（川口地区では珍しい）立派なものです。近年、祭礼は四月の第三日曜日で、当日は全楢原の氏子により祭典が行なわれていますが、神楽殿では地元芸能部によりカラオケ大会等が開かれ賑やかです。しかし古老の話によれば、以前は大きな幟を立て、青年団による農村劇が行なわれ大変な賑わいだったということです。

地形的に鹿島神社は字鹿島（本村）の南端の段丘の上にあり、北浅川をはさんで旧市街が一望できます。かっては眼下に田圃（今の清川団地 ― 字楢原あたり）が拡がり、春は蓮華が咲き乱れ、秋は黄金色の稲穂が波うつという長閑なところであったようですが、今は住宅が並んで、昔日の面影はありません。また村の管理していた水車ももうありません。

境内末社として、稲荷社が左側に安置されていますが、これは地元橋本一家の稲荷を境内に移したようです。祭神は倉稲魂命です。

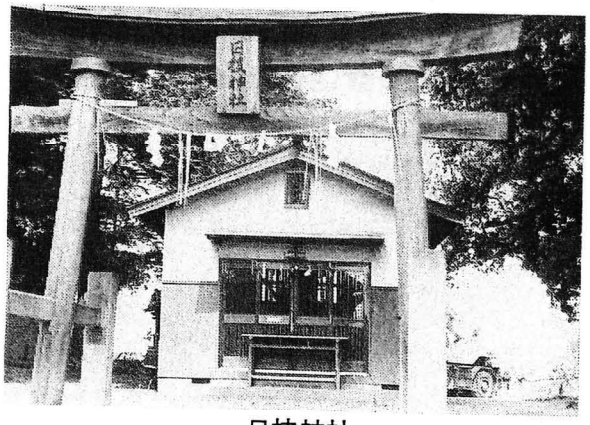
日枝神社（楢原二七七）

日枝神社は鹿島神社の裏、楢原小へ下る階段の左側にある小さい祠です。日枝神社を古老達が「山王さま」と呼ぶのは、明治元年に山王社、山王権現などを日枝神社という社名に統一したからでしょう。今もなお彼らには、「山王さま」の方が通りが良いようです。祭神は国常立命、大己貴命、瓊々杵命で創立年月は不詳です。現在社殿裏手ぎりぎりのところまで住宅が建設中です。

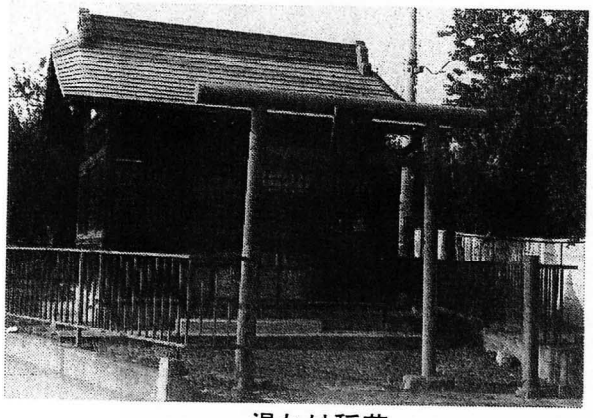
稲荷神社（荒井一〇一六）

神社前バス停を鹿島神社とは反対に北の方へ下って行き、多摩第一老人ホームの方へ行く途中に「湯かけ稲荷」で有名な荒井のお稲荷さまがあります。本殿、拝殿合わせて五坪ぐらいの小さな神社ですが、九月の第一日曜日の祭礼はたいへんに賑やかです。

祭りで行なわれる「湯かけの神事」に由来して湯かけ稲荷の名になったのです。大きな釜に湯をぐらぐら煮えたたせ、その熱湯を神主さんが、笹や榊の葉ですくって氏子にかけて、一年間の災い除けを祈願してくれるのです。このような珍しい神事が現在も残っているのは少ないそうです。祭神は倉稲魂命です。創立年月は不詳です。拝殿に子供用の立派な御輿が安置されて



日枝神社


湯かけ稲荷

ますが、いつ担ぐものなのか聞きそびれました。

日枝神社（山王林八一五）

地形的には楢原の北の方角で、明治橋の近くに山王の日枝神社の森があります。この神社は東京オリンピックの時、自転車競技が行なわれて以来、オリンピック道路と呼ばれている道路の三又路の端にあります。

天文五年四月、願主秋山庄大夫により創立され、佐貫の総鎮守となりました。大正十一年に改築されましたが、昭和四十一年の台風により社殿が倒潰し、翌年九月に現在の社殿が造営されたとのことです。

境内には本殿に向かって左に白山稲荷社、右手には御嶽神社が鎮座し、鳥居右横には廿日稲荷と並んで小さな稲荷さまがあります。廿日稲荷は、地元では井出家稲荷とも呼ばれています。井出敏男さんの話では、犬目山方面から来た手負いの狐が、井出家で死んだのを悼んで、天保十年二月二十日願主井出勝右衛門が、日枝神社境内に葬ったそうです。それにしても廿日稲荷と刻んだ石は、穴のあいた変わった石です。

鳥居の左手には庚申塔があります。並んで楢原には珍しい道標も建っています。御成婚記念の道標で右に「犬目加住村ヲ経テ福生青梅方面」左に「楢原小宮村ヲ経テ八王子方面」と刻まれているのが読めます。同種の道標は他に二ケ所あります（大正十三年製）。

媛宮神社（唐松七五八）

『皇国地誌』には所在が「唐松七五八」と記されていますが、昭和三十六年に川口町一五五七―三に遷座したとのことです。かつては唐松の子授け媛（姫）宮社と呼ばれていたようです。ついでながら、地誌には天真社（一本松四二四）が記されていますが、これはあとで触れます。名所一本松の附近に明治十年頃まであったとの話ですが、現在は見あたりません。

楢原に点在する神社を紹介して参りましたが、庵及び庵跡も紹介します。念西庵跡と一悦庵です。

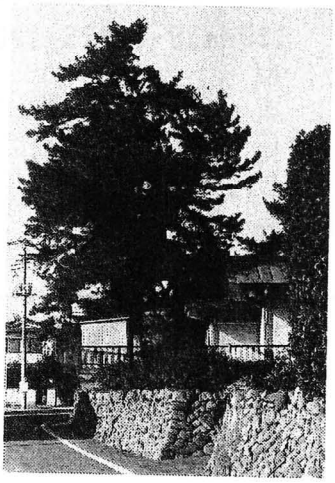
念西庵跡（楢原二五〇）

現在の楢原倶楽部が建っているところであり、『皇国地誌』には「南多摩郡下一分方村真言宗西蓮寺ノ持ナリ元禄五年壬辰三月村民橋本三郎兵衛ト云フモノ開基創立ス」と記されています（約三百年前）。また橋本義夫さんの『念西庵記』には「念西庵は創立年代不詳だが、墓地から推定するに四代目の橋本治兵衛（初代）（一六五五～一七二五年）が経済的に有力となり、後に隠居し、その子治左右衛門（一六九七～一七五七年）の代でまた大発展し、治左右衛門は西蓮寺の大釣鐘の大願主となった人。念西庵墓地の地割から見て、治左右衛門が墓地を整えここに念西庵を創立したのであろう。」と記されています。

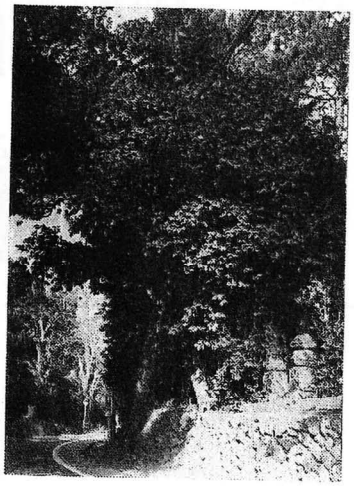
昭和二十年八月一日未明、戦災で焼失するまで設楽米洲書の立派な「念西庵」の額があったようですが、現在の額及び入口に建っている「名勝念西庵跡」の御影石の石碑の書は高尾山貫主秀順の筆であります。この碑は昭和四十七年に建てられています。

楢原の人達にとって重要なことは、明治十年（一八七七年）七月、犬目学校と楢原学校が合併して陶鎔学校が設立されるまで、この楢原学校が、念西庵の建物を借用していたということです。当時教員一名、生徒は男十九人、女六人の小さな学校、というより寺小屋でした。したがって、後述する楢原小学校、楢原中学校の昭和五十一年の開校は地元の人々にとって待つこと久しだったのです。それまで実に百年に及ぶ歳月がありました。

念西庵跡は高台にあり、浅川の氾濫から守られるように石垣がまわりに積まれています。この石垣は亀さんという名人が築いたといわれています。西側の南北の坂道は、今では舗装されていますがこれも亀さんの作った石畳で有名だった、と橋本正男さんが話してくれました。



念西庵跡のお能の松と石垣



星布椿

有名ついでに境内には「お能の松」と「星布椿」があります。老松はさながら能舞台に描かれた名木そのものの姿です。椿は江戸時代の有名な女流俳人、松原庵星布が今から二百五十年ほど前に植えたと伝えられています。多摩地方の名木として「この椿」という名がありますが、「この椿がその椿か」といわれたことに所以があるそうです。秀順の書になる念西庵跡の石碑の裏面に「念西庵よしお能の松殊によし」と刻まれています。

一悦庵（山王林八三八）

佐貫の日枝神社を東へ入ったところに瞽女宿として知られた一悦庵があります。浄土宗相即寺（下壱分方村）に属する庵です。

一悦庵から北浅川を横切って、直線的に相即寺へ通じる道を「相即寺道」と呼んでいたようです。尼さんが裾をからげて川を渡る風情を、井出敏男さんが話してくれました。

ここの本尊は阿弥陀如来で、一メートル余りの立派な阿弥陀様です。体内の文書によると「文久元年一悦庵本尊出火焼失致候　其后水崎瀧（りゅう）泉寺僧鳴園、同寺ヨ

一悦庵の六地蔵

リ阿弥陀如来持チ来リ安置ス」というようなことが見られますが、定かではありません。

一悦庵の入口右手には、六地蔵が並んでいます。比較的破損が少なく、和やかな顔で、訪れる人を迎えてくれます。六地蔵の上に、現存の楢原の板碑三基のうちの二基が、セメントの台座の上に並んでいます。高さは七十五センチと五十五センチのもので、完形を保っています。板碑の詳細は、別項に掲載されています。

瞽女の墓

一悦庵には昭和のはじめ頃からおさと、おかねという二人の瞽女さんが住んでいて、三味線にあわせて瞽女歌を唄いながら門付けをして生活していたようです。昭和十五年頃瞽女さんのイト、タカの二人が移って来たようですが、二十年頃に皆亡くなったようです。庵の中に「おこもりや　祖師を念じて　夜もすがら　法輪寺照子」の額が奉納されています。作者の照子さんがどこの人かは解りません。

現在境内の桜の木のもとに、川口瞽女イト、タカ之墓の石が井出敏男さんの手で据えられていて、三味線のバチも建っていますが、なぜか訪れた人に哀れさを誘います。楢原では、まだ瞽女さんの話をする人に出合うこともありますが、そのうち口の端にものらなくなるのでしょう。

さて神社、庵を案内してきましたが、楢原でよく耳にする名所、史跡の類について述べさせてもらいます。

鶴巻き（つるまき）

楢原の一番東で、陣馬山より流れ出した北浅川と、高尾山からの南浅川が合流するあたりで、鶴が舞っていたという伝承から訛って「つるまい」「つるまき」となったようで、正しくは「鶴舞い」でしょう。新市庁舎の横にかかっている鶴巻橋は、本来の鶴巻きとは少し離れています。

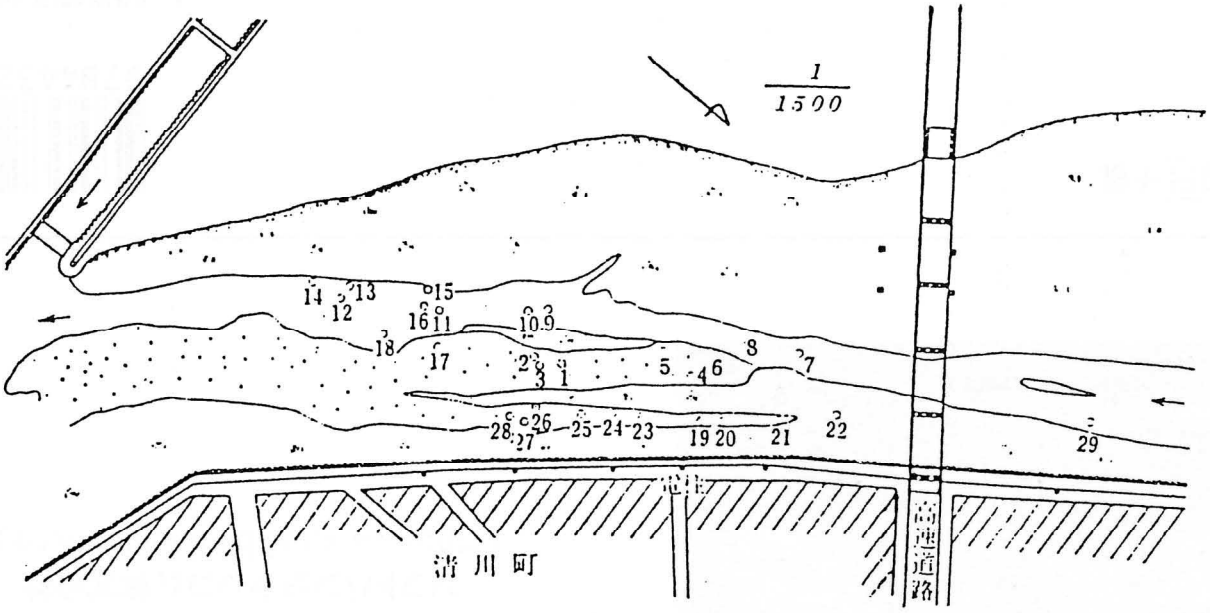
斉藤英子さんの『八王子百歌』より転載してみます。

〃川岸に遠き日　鶴が舞いおりぬ　うつくしきものほろびは疾きか〃

昭和の初め、付近一帯は佐貫部落の管理する雑木林がつづき、昼なおくらいところであったそうですが、その頃の面影はもうありません。

メタセコイア化石群

メタセコイアの化石が、鶴巻きの少し上流、清川団地（小字楢原）南西の北浅川の中より発見されました。二〇〇万年前のものとも、一〇〇〇万年前のものとも言われ、諸説あるようですが、そのような古い地質時代の森林がそのまま化石になった化石林は、日本でも例が少ないそうです。



第1図　楢原化石林の分布図（◎は化石株の位置　図のうち4, 10, 19, 22, 28, の5株はすでに発掘されている。図中，工事中の高速道路は，中央自動車高速道路で，すでに完成している）（木村ほか，1967より）

メタセコイア化石群は昭和四十二年の初め、中央高速道の工事の折りに発見されたそうです。八王子高校の吉山寛氏が偶然、川床に異常に黒い破片が散乱しているのを発見されたものです。発見した株数は二十九個にのぼりましたが（分布図参照）、基盤の露出していない砂礫層の下にも残存すると思われています。現在堀り出された化石株は次の場所に保存されています。

四　号　株　　都立高尾自然科学博物館
十　号　株　　国立上野自然科学博物館
十九号株　　八王子市立郷土資料館
二十二号株　　長瀞自然科学博物館
二十八号株　　日本私学教育研究所

これら化石の材組織から調査した結果、スギ科のメタセコイア属の化石と断定されています。現在残りの化石株はそのまま放置され

株番号	場　所	直　径 cm	保存状態
1	洲　上	東株65，西株70	東不整形・西年輪良好
2	〃	90	きわめて良
3	水　辺	40（復元60）	不　良
4	〃	150	きわめて良
5	〃	200	中15部不明
6	〃	90	南側欠損
7	水　中	70	中15部のみ
8	水　辺	150	良　好
9	〃	60	や　良
10	水　中	100	きわめて良
11	〃	南北65，東西90	良　好
12	中　洲	不　明	根の破片のみ
13	中洲水辺	50	良
14	中　洲	70	不　良
15	南　岸	50×70	やや不良
16	水　辺	70	欠　損
17	洲　上	根幅600×650	根のみ展開
18	〃	西60，東側不明	不　良
19	北側河床	（復元60×40）	ややや良
20	北側きれ地	（復元30）	〃
21	北側河床	（復元80）	〃
22	〃	50	やや不良
23	〃	不　明	根の破片が散開
24	〃	残存部分35	中心部のみ
25	北側湧水底	70	不良，不明瞭
26	北側河床	切口60，根250	根元のみ
27	〃	60	不　良
28	北側水たまり	130×100	きわめて良
29	橋の上流	不　明	不　良

第1表　直立樹幹化石の大きさと保存の状態
（木村ほか，1967より）

ていますが、説明板等があったら意義深いと思われます。

御嶽のお犬様（御判形跡）

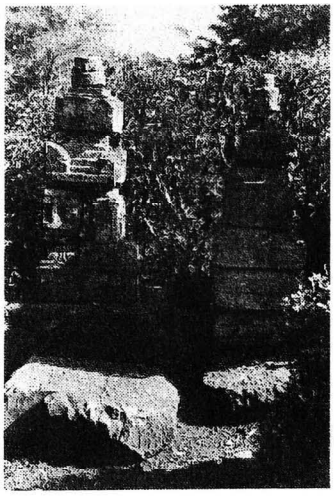
念西庵跡の西側にある小さな祠で、かっては楢原本村の御嶽神社であったともいわれています。鶴舞の鶴を楢原の狐がたぶらかしたという昔話の『石畳と化狐』から、御嶽のお犬様を祀り、化狐の通行除けの願かけをしたといわれています。この辺りを村人達は「御判形」といっていて、高札場のあったところです。力だめしの力石が置いてあって、昔は村人達が良く力だめしをしたそうです。

「すりばち」と「ふかんど」

昔の楢原、特に台地下の今の楢原小附近には水源が多くありました。今は北浅川の川床も下がり、その面影はありません。『皇国地誌』にある川はその代表で、水源は一本松の南あたりで、台地からの湧水、及び北浅川の伏流を集め、相当な水量もあったようです。今の清川団地が田圃の頃は、皆この川の水で灌漑していたのです。その流れの中ほどに、民話『天狗のすりばち』で有名な「すりばち」と少し下流に「ふかんど」と呼ばれる名所があり、地元の人達は、今でもなつかしそうに話してくれます。ここは子供にとっての良い水浴び場で、深いところは一丈ほどもあり、周囲は樹木がうっそうと茂り、コウホネ（川骨）が、美しくあたり一面黄色く咲く楽園だったと高橋正司さんが話してくれました。

五輪様

神明神社の上の台地に森田家の「五輪様」と呼ばれる五輪塚があります。現在の家主、森田武司さんに伺ったところ「五輪様」の実体は良く分からず、またいつ頃のものかも分かりませんが、戦いで死んだ武士を埋葬したところだそうです。刀も出たことがあり、刀塚だったともいわれていますが定かではありません。森田光枝さんの話では、大きな土盛りの塚があり、その上に五輪様があったとのことです。以前にあった場所から少し移動し、現在は楢原二二三の畑の一角に祀られています。今でも森田家では、盆に必ず線香をたむけて、霊を慰めているそうです。なおこの近くの森田家本家の墓地に板碑が一基、セメントで固定されて建っていますが年号は読めません。



五輪塚の塔

楢原本村の六地蔵

念西庵跡前に清川団地に向いて並んでいます。六基の地蔵さんは永い年月を経て満足な形がありません。六基のうち二基に、寛保元年（一七四一年）の文字が読めます。しかし六基の地蔵さんとは別に、左端にある比較的形状の良い地蔵様は、明治二十五年八月と発起人の女性名が二十名余り刻まれていることから、当時の楢原本村

の念佛講の女性達が供養のために建立したものと思われます。

一本松

松枝、一本松と楢原の二つの地名にもかかわっているこの巨松は、樹齢五百年以上ともいわれ、どことなく霊気さえ感じるほどです。

この松は石垣の盛り土の上に植わっているためか、古墳だともいわれています。戦国時代の物見、狼煙にも利用された樹であろうとの話もあり、また地元の人は子供の頃天狗が腰かけて見張っている、怖い場所だといい聞かされていたといいます。

しかし今年の夏、急に枯れ始め、遂にこの原稿を書いているとき（十月二十五日）、枯死のため伐り倒されることになり、その様子を淋しく眺めました。

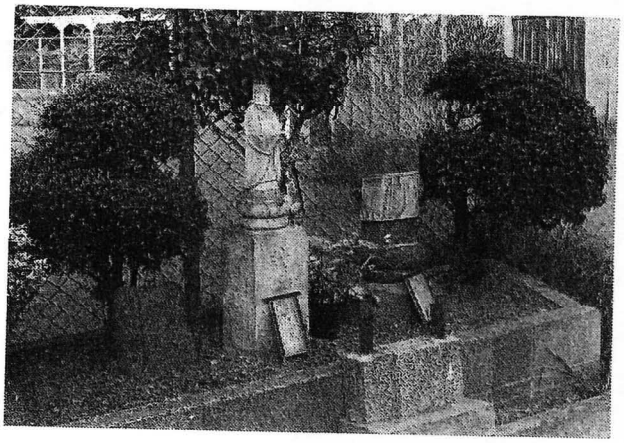
この松は二の枝で樹齢二百五十年を数え、幹の中心は腐り、もしかしたらこの松の主かも知れない蛇や蜂の巣になっていました。やはり相当な年輪を経た松だったとつくづく感じました。願わくば二代目一本松の植樹を希むところです。

鹿島古墳群

積石塚古墳として楢原鹿島古墳が現在の鹿島神社境内のヒノキの林の中にあります。しかし、現在では造成及び住宅の建設等により、その存在すらはっきりしないありさまで残念です。一本松古墳とともに、この附近一帯の段丘上には数基の小墳丘状の古墳が点在しているといわれています。楢原鹿島古墳群については別項で記載しますので、ここではこのくらいにしておきます。

その他の石仏等

石仏の頃で詳しく紹介があるかと思いますが、荒井に石仏三基があります。橋本栄八さんの地所にあったので「栄八地蔵」とも呼ばれていたそうで、中央の新しいものは内田嘉市さんの祖母モトさん（千人隊山崎十兵衛の長女）、八十八歳建立となっています。荒井のエッソスタンドの横の辻にも二基ありますが、道路拡張の折りに動かしたので傷みもあり年代等不明です。内田嘉一さんのお話によると、昔から手足の痺れに効くとか、交通安全祈願にもよいとかいわれているそうです。



荒井の「栄八地蔵」

次に現在楢原に点在する公共施設について簡単にふれてみます。

東京都立八王子北高等学校（楢原町六〇一）

楢原の交叉点を北へ向かってすぐ左側にあります。小字幸神にあり、昭和五十三年十八学級の都立高校として、小平西高校内に開設され、翌年に現在地に移りました。敷地面積約二八、〇〇〇平方メートル、建物一二、三六〇平方メートルの規模で、六十二年度学校要覧によれば、男女生徒数八百五十二名、教職員五十三名です。「地域に根ざした高校」としての地歩を固めてきて、六十二年十一月、十周年の記念行事を行なうとの話です。

八王子市立楢原中学校（楢原町一二三五）

楢原の東端、小字神明にあります。昭和五十一年四月、市立第二中学校内に併設開校し、七月校舎落成により移転しました。開校記念日は五月十日で、昭和六十年十一月に開校十周年を祝ったとのことです。六十二年五月、現在生徒数七百二十五名で、学校の方針の知・徳・体の調和のある生徒の育成が進行されているそうです。

敷地面積一八、八六一平方メートル、建物四、八四〇平方メートルです。

八王子市立楢原小学校（楢原町一二八七ー二）

鹿島神社南西の段丘の下にあり、周囲は緑に恵まれた環境の中にあります。楢原中学校と同時開校で、地元有志による校名審議会において中学校、小学校とも万場一致で「楢原」が冠されました。

敷地面積一六、八五二平方メートル、建物四、〇〇三平方メートルです。

昭和五十一年四月市立陶鎔小学校に併設、一部プレハブ教室を使用して開校、九月より現在地に移転しました。昭和六十一年三月、開校十周年記念式典が学校と地元の一体で行なわれ、野口正久先生の記念講話もあり、十年誌も発行されるなど盛大なものでした。

六十二年四月現在、児童数四百一名です。

財団法人日本私学教育研究所（楢原町一二六三）

楢原小学校の東側で、学校と同じく小字前川原に昭和四十一年四月より開設、運営されています。日本私立中学高等学校連合会が設立したものであり、設立趣意書にある「学校教育特に高等学校以下においては、教育実践ならびに経営の実際に則した技術や理念の基本的、実際的研究が極めて必要である。またその研究の成果を、如何に実践の場において生かすかが、教育研修の主な目標とならなければならない」という趣旨のもとでの私学教育の研究・研修のセンターとして機能しているとの話でした。

東京都水道局楢原給水所（楢原町一二九四ー三）

楢原小学校の北側に、昭和五十七年六月より完成稼動しています。小作の浄水場より直接パイプで送られてくる多摩川の上水を、この給水場で圧力を加え二方向へ送水しているのです。一つは清川、大

和田方面へ毎日一万トン、もう一つは元本郷の浄水場を経て、めじろ台、寺田方面へ、さらに町田市へと毎日二万二千～三千トン送水しています。楢原給水所は東京都水道局日野増圧ポンプ所から無線で制御されているそうです。

社会福祉法人多摩養育園多摩第一老人ホーム（楢原町九七一）

小字荒井の稲荷神社の北側に、昭和二十七年十月開設。この施設は老人福祉法に基づき、六十五歳以上の者であって、身体上、精神上、環境上および経済上の理由により、居宅において養護を受けることが困難な、おおむね健康な老人を保護し、健全で家庭的な生活を送ることを目的として開設されています。昭和三十三年、三十八年に天皇陛下より優良施設に指定されるという光栄に浴しているそうです。

定員二百名。付帯施設に多摩養育園診療所、納骨堂があります。

ところでこの老人ホームの門のなか、右側に、明治の社会主義詩人樋口配天の詩碑があるのはあまり知られていません。大谷石造りの屏風のような石碑に「梭の音」の題名の厭戦詩とも呼べる詩板がはめ込まれています。配天は晩年この老人ホームに入所し、昭和四十四年九十歳で死去しています。七五調で五節からなる詩は省略しますが恋する人を戦場にとられた乙女の気持ちを表した詩です。

そのかたわらにセメントの牛像の上に「卜山禅師頌徳碑」が建っています。碑には卜山禅師の徳を賛えた説明が刻られています。

光明第三保育園

多摩第一老人ホームに隣接（同一地番）している児童福祉施設で、昭和二十六年に開園されています。現在では乳幼児合わせて定員百名です。

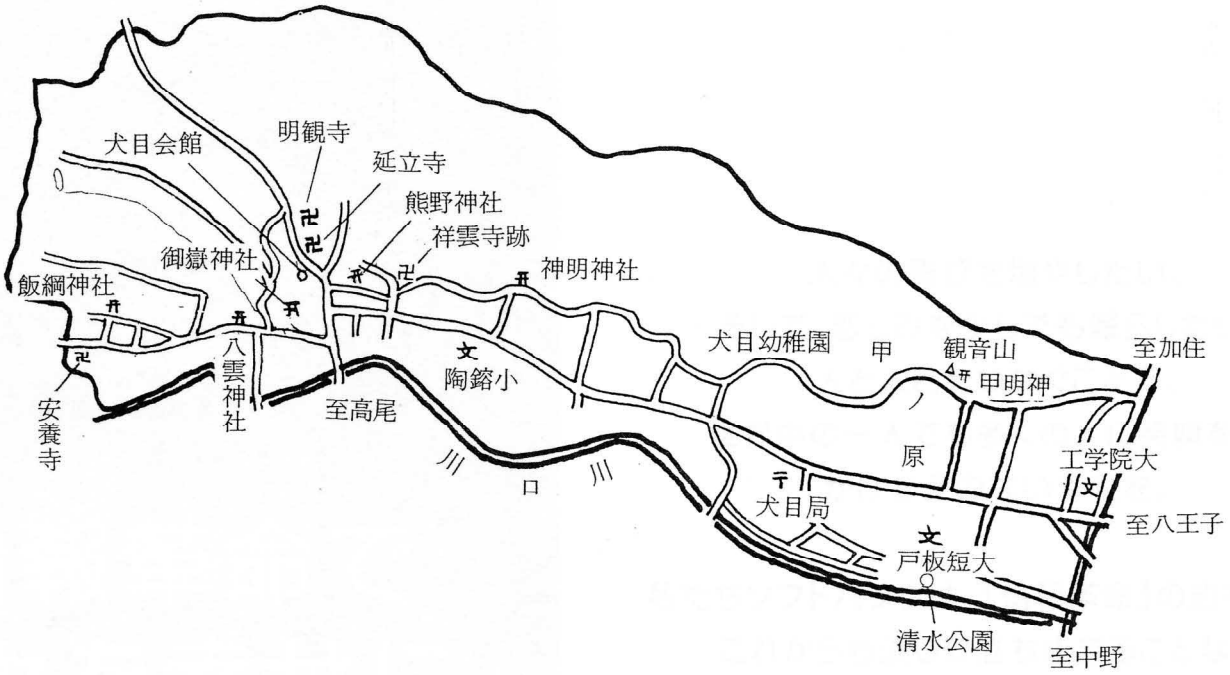
楢原幼稚園（楢原町四一三）

史跡、一本松の東側の段丘の上にある幼稚園です。昭和三十八年六月、認可設立となり今日に至っています。他の園と異るのは毎日園児を徒歩通園させ、大自然の試練に耐える体力、根性を養わせ、併せて自立心を育てることをモットーにしているということです。

犬目地区

犬目地区には豊かな自然と共に多くの史跡が残されています。秋の気配が漂いはじめた犬目の古道に地区幹事の富士原幸之さん、地元に詳しい木崎保拡さんの案内で足を踏み入れて、はじめてここに残された史蹟の多さに目を見張りました。木崎さんのお宅で神社や地区の古い話などをお伺いした後、一日をかけて史跡を見て廻りました。碑文の解読は富士原さん、解説と案内は木崎さんにお願いしました。

私が深い感銘を受けたものとして、地区中央の殿ケ谷（とのがや）にある熊野神社の本殿があります。川口に現存する貴重な文化財の一つであると思います。中央よりやや西寄りの川原（かわはら）にある庚申塔は川口最古の



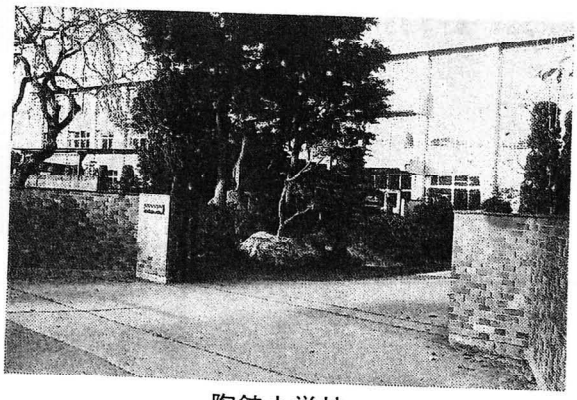
犬目地区

石仏としての年代を伝え、その彫りの見事さは石仏文化の開幕を飾るにふさわしいものです。中央よりやや東寄りには百余年の伝統を持つ陶鎔（とうよう）小学校があります。犬目の人士を育くんだ陶鎔小には地元の人達の誇りが感じられます。西のはずれには遠く南北朝時代に創建された安養寺があり、江戸時代は十四石五斗の御朱印状を賜っていました。今もその風格を伝えています。地区の北を走る丘陵には犬目八社と呼ばれる神社が鎮座して、信仰を集めています。地区のやや西寄りの丘陵上には中原台地があり、縄文時代の住居跡が多数発掘されています。

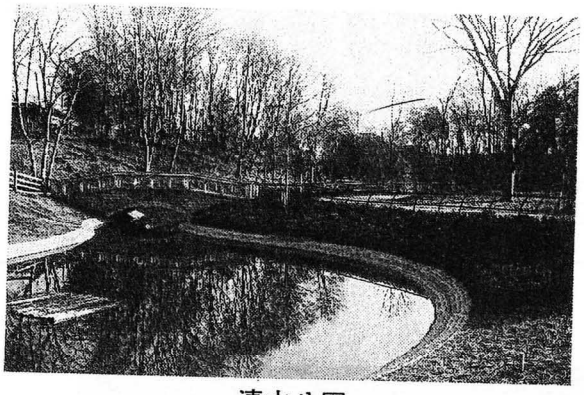
犬目には地区内に水源を持つ谷戸川と残堀川があり、合流して川口川に注ぎます。東寄りにかけては甲ノ原が開けています。畑地、丘陵、台地、川と水田といった多様な生活環境が生み出す文化は多彩です。古道は地区を南北と東西に貫いて走っています。一つは今熊道で五日市と小宮・日野を結ぶもの、もう一つは佐野往還（おうかん）で、戸吹と元八王子・恩方方面を結ぶもので、この街道に沿って史蹟が点在し、その交点である川原には江戸時代、高札場のあったことが知られています。

清水公園

犬目町と楢原町を結ぶ新清水橋の袂から堤防沿いに少し上流に進むと道が行き止まりになります。その先が清水公園です。雑木林を巧みに残して遊歩道が作られ、子供の遊び場などもあります。大き



陶鎔小学校



清水公園

な人工の池があり、湧水が溢れ、清水公園の名にふさわしい景観です。池には美しいカワセミの飛翔が見られました。公園の北側、段丘上には戸板女子短期大学のキャンパスが広がっています。また西側には笹ノ原住宅が屋根を並べています。清水公園にはしっとりと落ちついた雰囲気がただよっていました。

陶鎔小学校

笹ノ原住宅の西には川口川を背にして、百余年の歴史を持つ陶鎔小学校があります。東側に三階建の校舎が二棟あり、その西に体育館、さらにその西側に広い校庭があり、サッカーに興ずる子供達と、熱心に応援する父母の姿が見られました。昭和五十二年に創立百周年を迎え、立派な記念誌が作られ、その歩みが網羅されています。

甲ノ原

清水公園の北側一帯に広がる甲（こう）ノ原は兜ノ原とも呼ばれ、甲観音（かぶと）と甲（かぶと）明神のあったことが知られています。地名の起源については八王子城攻撃に向かう前田利家の軍勢が布陣したことによるといわれていますが、はっきりしたことはわかっていません。北に丘陵を背負い、南を川口川が流れています。水利には恵まれていませんが黒土に覆われて豊かな畑作地帯となっています。地区の東の境界に工学院大学が白亜の偉容を誇っています。甲ノ原バス停の東約百メートル附近より北の丘陵に向かって進むと、甲明神と観音山へ出られます。観音山は甲観音の故地と伝えられていますが、観音像は現在、安養寺に移されています。附近の畑には甲明神の鳥居や御飯（ごはん）塚（前田、上杉軍の炊事跡）がありましたが、鳥居は神社の近くに移され、御飯塚は地名しか残っていません。

甲明神も観音山も登り口の標識はなく、山裾を東西に走る旧道との交点が目印です。交点をまっすぐ登ると甲明神、左折して約二十メートル西側を登ると観音山です。

甲明神に向かって坂を登ると石の大鳥居が現われ、明治の八王子の富豪、関谷源兵衛建立の由が刻まれています。鳥居に続いて石段があり、それを登りつめると山腹を削った狭い境内に出ます。正面に四尺四方の拝殿、その左に天満宮の石の小祠があり、境内には古

木が見られます。社内の扁額には日露戦争の勝利を報告したと思われる「征露二年（明治二十八年）打風鳳城」の文字が記されていました。神体は無く、前田・上杉軍の残していった兜を祭神にしたとの伝承が残っています。天満宮には硯が供えられ、石祠には「寛政九丁巳年（一七九七年）」という江戸時代中期の年代が記され、歴史の古さをうかがわせます。施主として万五郎以下四名の名が刻まれています。甲明神の東の窪地はミタラシと呼ばれ、湧水の枯れたことがないといわれています。

観音山の入口には地蔵堂があり、地蔵菩薩の石仏が安置されています。これには次のような刻字があり、古い石仏であることを伝えています。「下犬目村念仏講中　願主須崎伴右衛門　安永二巳歳（一七七三年）吉祥日」。民家の間を分けて少し登ると観音山に出ます。山上は広々としており、その一角に観音堂があったと伝えられている地形が残っています。北西側に稲荷神社と三峰神社の小祠が並んでいます。稲荷は正一位稲荷を祀り、三峰神社には秩父三峰神社講中による代参の御礼が年の順に並べられていました。

山頂からの展望は素晴らしく、眼下に甲ノ原、遠くに八王子市内や高尾山、城山（八王子城趾）が見渡せます。

百万遍供養塔と地蔵菩薩

山裾の旧道に沿って西に進むと犬目幼児園があり、折りしも運動会で子供達の歓声が響き渡っていました。その少し西に百万遍供養塔と地蔵菩薩の石仏があります。供養塔は正面に蓮の花、その上に二十四字（一部欠落）の梵字を円形に配し、左側面には次のような文字を刻んでいます。「武州下犬目村女講中　□明六丙午（天明六年＝一七八六年）季九月如意日」。史上に名高い天明の大飢饉の最中のことです。この大飢饉と、立派な石仏はどのように結びつくのでしょうか。石仏の少し東に山へ向かう道があります。すぐに民家の古い土蔵や墓地が現われます。墓地には青石塔婆（板碑）にはじまる墓石が標本のように並び、五百年の歴史を一日の如く表現しています。黄金色に色づいた谷戸田を左に見て山を登っていくと、右手に屋敷跡があります。明治時代の川口を代表する教育者、野口米太郎先生が住んでいたところです。道の両側には古木が並び歴史を感じさせます。山の中腹に山祇（さんぎ）神社の拝殿があります。間口一間、奥行一間半の新しい建物です。山祇、すなわち「山ノ神」は林業の繁栄と山仕事の安全を祈る神です。山の雑木を切り出し、薪（まき）にする共同作業（薪山（まきやま））が行なわれ、八王子市内の染物屋や一般家庭に売られ、大切な現金収入源でした。山祇神社はそんな犬目の山の生活の一面を今

斉藤家の門

に伝えています。

旧道をさらに西に進むと神明神社があります。続いて熊野神社があり、さらに北の方に多摩養育園、滝山病院があり、そのずっと山奥に第六天があります。熊野神社を中心にして旧家が並び、八王子千人隊組頭斉藤家の門はその風格を伝えています。

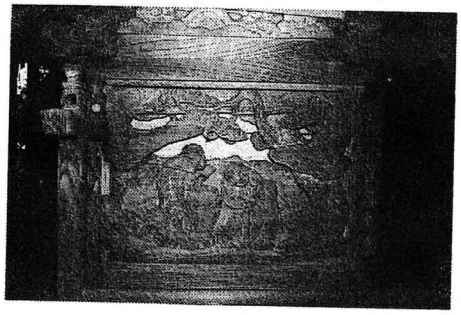
神明神社は旧道より約二〇メートル入った山裾にあります。拝殿は新築されたばかりで間口一間、奥行一間半です。境内に茂る古木が古い歴史を伝えていますが、それを証明する遺物はありません。

熊野神社周辺

木製の立派な鳥居をくぐり、急階段を三十三段登ると、その上に広さ約五十坪の境内があり、拝殿は正面三間、奥行二間でさらに二間の覆堂があります。石段の手前に燈篭があり、これには次のように刻字されています。

「奉献御神前　寛政三辛亥歳（一七九一）九月吉祥日　武州多摩郡犬目村施主氏子中、惣氏子他四人」

覆堂に鎮座する本殿は屋根が精巧な板の重ね葺き、四隅には柱上、柱下共に精緻を極める竜と狛犬の彫物、正面を除く三面の壁にはそれぞれ異ったモチーフの彫刻が施され、現在の技術ではこれを再現することは不可能と思われるほどです。本殿は屋根に損傷がある他、ローソクの火による焦げ跡も残り、傷がひどくなっていますが、簡単な修理だけでも数百万円の費用がかかるといわれます。この精巧な文化財が一日も早く修復され、後世に伝えられることを願うのみです。



熊野神社本殿の彫刻

この本殿についてはその完成当時（明治初期）の言い伝えとして、八王子市内本郷横町三本杉の宮大工が作ったといわれ、弟子が天狗（背面）のうちわの大きさを誤り、親方からしかられたという逸話が残されています。しかし、本殿に奉納された木剣には寛政七年の銘があり、本殿が作られたのは、この頃か、とも思われます。

次に私達は第六天に向かいました。丘陵の山裾から山中に向かって進み、尾根の背を分ける辺りの左側の山上に第六天と伝えられる石の小祠がありました。不思議にも全く同じ祠が二つ並び、刻字も全く同じでした。

「寛政十三酉歳（一八〇一）正月吉日
世話人願主斉藤庄右衛門　同新施主上下想村中」

第六天は神奈川県を中心に分布する土俗信仰ですが、祭神等はっきりしたことは不明です。ただ仏教上では欲界六天の最下層の第六天を支配する魔王として牛頭天王をあげています。第六天は牛頭天王の別称かとも思われます。その信仰は八王子、川口の歴史に深くかかわり、多くの書物に記されているので本稿では省略しますが、

その伝承は犬目についても残されています。牛頭天皇は八坂、八雲名の神社に関する祭神です。

第六天からの帰途に祥雲寺跡地がありました。この寺は現存せず、採土されて地形が一変し、住宅地となっているため往時をしのぶことはできません。禅宗曹洞派桂福寺（戸吹）の末寺で、住職の地方転出により廃寺になったものです。陶鎔小創建に当たり、この一角から採堀された土が盛り地として使われたとのことです。この寺について『新編武蔵風土記稿』は谷野町の深翁寺の記事と混同しており、江戸時代の正しい姿を知ることができないのは残念です。しかし往時を偲ぶものとして薬師堂が残っており、端正な薬師瑠璃光如来を本尊として安置しています。明治時代の『皇国地誌』にはこの寺についての記録があり、境内の広さなどが記されています。

南無東方薬師
瑠璃光如来座像

犬目には地区内に水源を持つ二つの小さな川があります。谷戸川と残堀川です。小流ながら周囲の水田を潤しています。谷戸川は高尾街道の西側を流れ、これに沿って開かれた水田の一角に犬目会館が新築され、町民相互の交流に広く利用されています。

残堀川に沿って開かれた水田地帯は川口で最も大きな広がりを持ち、川にそって延々と続いています。川は南の中原台地に沿って流れていて、水田にはたくさんの野鳥の姿が見られました。

最奥部には葦の茂みも見られます。水源には池があり、豊かな水をたたえています。その先はゴルフ場のグリーンに連なっています。

中原台地は川から十メートル程の高さで、この台地に住んでいた縄文人はこの川の水を利用していたのでしょう。埋め立てのために山から押し出された土砂の中に土器片が散見されます。当地の坂本氏が所蔵する中原地区出土の土器の中には弥生式土器やそれ以降の土器も多く、典形的な複合遺跡であることを示しています。

最近、犬目地区に復活した犬目囃子は藁職人（屋根職人）がこの地に伝えたものですが、農耕地帯にふさわしい郷土芸能のように思われます。

犬目地区はほぼ全域が黒土に覆われ、豊かな実りを約束された土地なのです。また谷戸地区には念佛講が今も残り、昔ながらの犬目の姿を現在に伝えています。

御嶽神社

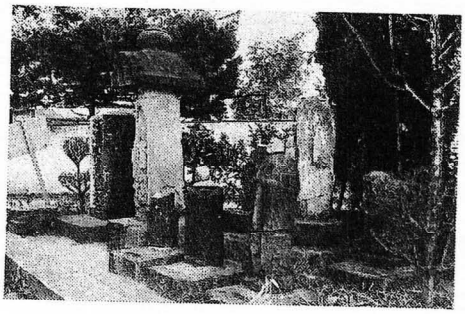
御嶽神社は犬目村の村社として犬目八社を合祀しており、地区内で最大の氏子を抱えています。残堀川を渡ると左に遊園地がありますが、元は祭礼の際に舞台がかけられ、青年団による農村劇などが

行なわれたところです。二十五段の石段を登ると山腹を削った五十坪ほどの境内に正面一間、奥行一間半の拝殿があり、二間四方の覆堂があり、本殿が奉安されています。神体は鏡です。しかしここには古いことを記したものが見当たりませんでした。神社の下に細い道があり、これが旧道であったことが古文献との比較で確かめられます。

御嶽神社入口より少し西の細い道を左折すると川原に出ます。ここには江戸時代に犬目村の高札場がありました。また石仏群とでも言うようなたくさんの石仏が集められています。その中では元禄の庚申塔がひときわ目を引きます。文字庚申塔と青面金剛（しょうめんこんごう）が並んでおり、次のような刻字があります。

「武州多摩郡小宮領犬目村願主講中二十二人　□□元禄六年（一六九三年）酉九月十九日　修復造立　寛政五癸丑年（一七九三年）十月二十二日」

青面金剛の刻字は判読できませんが、元禄の文字だけ奇跡的に残っています。つまり、青面金剛は元禄六年に造立され、それよりちょうど百年後に修造され、その際に文字庚申塔が作られているのです。この青面金剛こそ川口最古の石仏ということになり、約三百年の歴史を持っていることになります。



西川原の庚甲塔

私達は再び街道に戻り、道に面した八雲神社を訪れました。道からすぐ鳥居になり、石段を登ると境内に出ます。拝殿は正面、奥行とも二間で覆堂があります。右奥には稲荷の小祠があります。古木が茂り古い歴史を感じさせますが、古い遺物は見当たりませんでした。八雲神社は元は牛頭天王ゆかりの天王社であったと思われ、江戸時代の記録は天王社として記しています。天王社は明治以降は八雲神社と呼称を改めています。祭神の牛頭天王は欲界を支配する天魔ですが、釈迦が悟りを開いたとき、祇園精舎を守護していたとして、京都祇園の八坂神社の祭神となっている他、天王様の名で広く信仰されています。その反面、欲望の神、汚れた神として迫害された歴史も持っています。

中原台地

私達は犬目八社の最後として飯綱神社を訪れました。高尾山ゆかりの神社で安養寺の持ちでした。石の鳥居をくぐると正面二間、奥行三間の拝殿があり、拝殿にはお日待の炉が切られています。社内には次のような覚え書きがありました。

「当社再建の棟札存在し処、明治十年八月、乞食非人等夜宿し、右棟札を採り集め、焚物として終に焼失せし、その時の札には明治元年五月別当犬目山安養寺と之（これ）有候、後后の為一筆寸言記載申置く事上犬目村中原氏子中社掌敬白」

高尾山に開かれた真言宗智山派と安養寺、飯綱神社のかかわりが

示唆されています。飯綱神社の背後の台地は中原台地と呼ばれています。ここには縄文時代の住居趾が渡辺忠胤先生によって発掘され、多くの報文に記されています。この台地に立ったとき、すでに秋の日は西に沈んでいました。住居趾がどこにあったか今はよくわかりませんが、畑のそこかしこに土器片が散見されました。

神社のうつり変わり

寛政年間に調査された八王子千人隊の記録『新編武蔵風土記稿』と現在の犬目八社の比較は次の通りです。

江戸時代

神社名	社地	社殿	管理者
(1)甲明神社	三十五坪	小祠	安養寺
(2)神明社	五十坪	小祠	村民
(3)熊野神社	七十坪	小祠	村民
(4)御嶽社	一段余	一間半に三間上屋付き	安養寺
(5)天王社	八十五坪	二間に一間半上屋付き	安養寺

現在の犬目八社

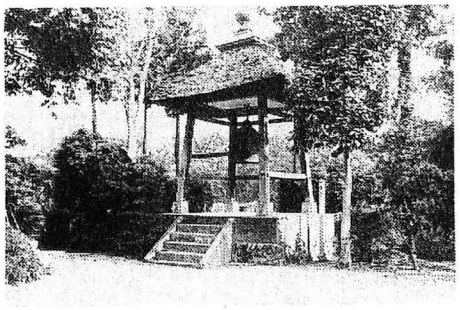
(1)甲明神	六百六十四坪	四尺四方の小祠	氏子十四戸
(2)神明神社	四十二坪	一間に一間半	氏子十七戸
(3)熊野神社	五百五十八坪	三間に二間覆堂、本殿付き	氏子三十戸
(4)御嶽神社	七十九坪	二間に一間半覆堂、本殿付き	氏子六十三戸
(5)八雲神社	三百二十坪	二間四方	氏子十四戸
(6)飯綱神社	百十二坪	二間に三間本殿付き	氏子二十四戸
(7)山祇神社	百十六坪	一間に一間半	氏子十一戸
(8)稲荷神社	三百二十一坪	三尺四方	氏子下犬目中

第六天は石の小祠で建物はなく、社地二六二坪は熊野神社の社地に含まれています。(5)の八雲神社は江戸時代は天王社、(6)(7)(8)は江戸時代の記録に残っていません。

安養寺

犬目山安養寺は地区の西のはずれにあります。南北朝時代に創建された古寺で開山僧頼鎮(らいちん)は一三七七年に没っしています。江戸時代以降は高尾山を大本山とする真言宗智山派に属し、西寺方町宝生寺末寺でした。頼鎮は宝生寺の開山僧明口(みょうぼん)より古い時代の僧です。創建当時の遺物としては南北朝時代以前の作と思われる川口最古の形式を持つ板碑を境内に残しています。

その観音堂は境内の南に本堂と向き合っています。観音堂には、下犬目の観音山から移された甲観音であるとの伝承を持つ十五センチほどの聖観音像が安置されています。御尉子には天保十五年（一八四四年）の銘がある他、同じ年に楢原



安養寺鐘楼

邑佐貫の大工秋山久兵衛の寄付によること、当山の僧、興善の代であることなどが記されています。御住職の特別の計らいにより御尉子と聖観音像をつぶさに拝観することができました。聖観音像の台座には文字が記されていますが解読できませんでした。またその宝冠は兜のようにも見え、あるいはこれが甲観音の名の起こりかとも思われます。施主として下犬目の正（祥）雲寺下念仏講の名が記されています。

本堂は文久三年（一八六三年）に焼失し、その後再建されたものです。本尊は不動明王です。徳川歴代将軍より十四石五斗の御朱印を賜っています。境内中央に立派な宝篋印塔があり、文化七庚午年（一八一一年）天二月と刻字されています。文久の火災以前に建てられたものです。山門は東、鐘楼は東南にあって風格のある造りです。鳴鐘だけは戦後の昭和三十九年一月に鋳造されています。山門を入ってすぐ左には困民党首領塩野倉之助の碑（昭和二十八年建立）があります。本堂より道をへだてた北側に寺を守護する勝軍地蔵があります。

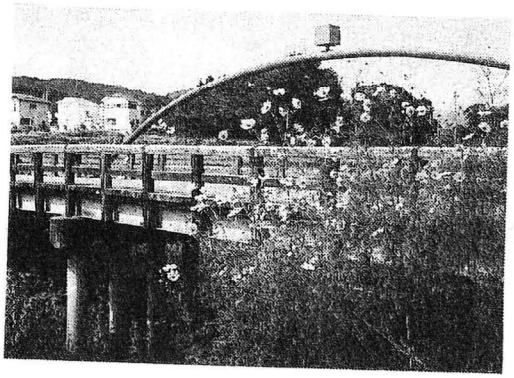
安養寺は犬目山という山号にふさわしく犬目地区六百年の歴史を語りかけてくれます。その上に近代建築の粋をこらした客殿が新築されて、新しい息吹きを加えました。その史跡を一つ一つたどっていると時の経つのを忘れてしまいます。

このほか地区内には新しい宗教施設として延立寺・明観寺・聖クララ修道院があります。また丘陵には二つのゴルフ場のグリーンが広がっています。

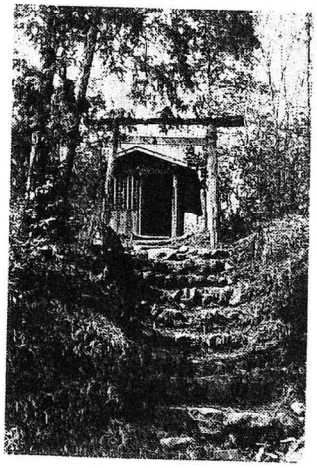
川口地区

秋川街道は川に沿って走り、木材、薪炭、生糸、野菜など八王子市街へ運ぶ道で、以前は五日市街道と呼ばれていました。この街道によって文化や人の縁の往き来もありました。

秋川街道から橋を渡って十内入へ向かいます。この橋はこの辺でも珍しくなった木橋で、河岸にはコスモスの花が初秋の風にゆれ風情を添えています。橋を渡った左側の低地は、昔は大水が出ると渕になって渦が巻いたという六万坊です。六万坊の地名は八王子市内にもあり、やはり水の流れに関わる地名ではないかと、以前秋間健郎氏から伺ったことを思い出します。右手に広がった水田の稲穂は、



十内入橋



金勢稲荷社

示唆されています。飯綱神社の背後の台地は中原台地と呼ばれています。ここには縄文時代の住居趾が渡辺忠胤先生によって発掘され、多くの報文に記されています。この台地に立ったとき、すでに秋の日は西に沈んでいましたが、住居趾がどこにあったか今はよくわかりませんが、畑のそこかしこに土器片が散見されました。

神社のうつり変わり

寛政年間に調査された八王子千人隊の記録『新編武蔵風土記稿』と現在の犬目八社の比較は次の通りです。

江戸時代

神社名	社地	社殿	管理者
(1)甲明神社	三十五坪	小祠	安養寺
(2)神明社	五十坪	小祠	村民
(3)熊野神社	七十坪	小祠	村民
(4)御嶽社	一段余	一間半に三間上屋付き	安養寺
(5)天王社	八十五坪	二間に一間半上屋付き	安養寺

現在の犬目八社

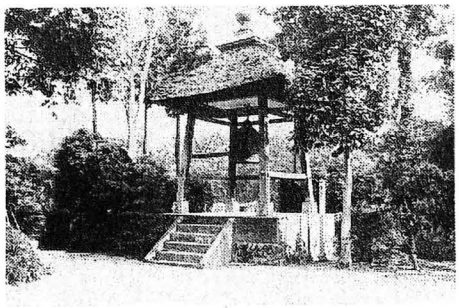
(1)甲明神	六百六十四坪	四尺四方の小祠	氏子十四戸
(2)神明神社	四十二坪	一間に一間半	氏子十七戸
(3)熊野神社	五百五十八坪	三間に二間覆堂、本殿付き	氏子三十戸
(4)御嶽神社	七十九坪	二間に一間半覆堂、本殿付き	氏子六十三戸
(5)八雲神社	三百二十坪	二間四方	氏子十四戸
(6)飯綱神社	百十二坪	二間に三間本殿付き	氏子二十四戸
(7)山祇神社	百十六坪	一間に一間半	氏子十一戸
(8)稲荷神社	三百二十一坪	三尺四方	氏子下犬目中

第六天は石の小祠で建物はなく、社地二六二坪は熊野神社の社地に含まれています。(5)の八雲神社は江戸時代は天王社、(6)(7)(8)は江戸時代の記録に残っていません。

安養寺

犬目山安養寺は地区の西のはずれにあります。南北朝時代に創建された古寺で開山僧頼鎮（らいちん）は一三七七年に没っしています。江戸時代以降は高尾山を大本山とする真言宗智山派に属し、西寺方町宝生寺末寺でした。頼鎮は宝生寺の開山僧明口（みょうばん）より古い時代の僧です。創建当時の遺物としては南北朝時代以前の作と思われる川口最古の形式を持つ板碑を境内に残しています。

その観音堂は境内の南に本堂と向き合っています。観音堂には、下犬目の観音山から移された甲観音であるとの伝承を持つ十五センチほどの聖観音像が安置されています。御尉子には天保十五年（一八四四年）の銘がある他、同じ年に楢原



安養寺鐘楼

邑佐貫の大工秋山久兵衛の寄付によること、当山の僧、與善の代であることなどが記されています。御住職の特別の計らいにより御尉子と聖観音像をつぶさに拝観することができました。聖観音像の台座には文字が記されていますが解読できませんでした。またその宝冠は兜のようにも見え、あるいはこれが甲観音の名の起こりかとも思われます。施主として下犬目の正（祥）雲寺下念仏講の名が記されています。

本堂は文久三年（一八六三年）に焼失し、その後再建されたものです。本尊は不動明王です。徳川歴代将軍より十四石五斗の御朱印を賜っています。境内中央に立派な宝篋印塔があり、文化七庚午年（一八一一年）天二月と刻字されています。文久の火災以前に建てられたものです。山門は東、鐘楼は東南にあって風格のある造りです。鳴鐘だけは戦後の昭和三十九年一月に鋳造されています。山門を入ってすぐ左には困民党首領塩野倉之助の碑（昭和二十八年建立）があります。本堂より道をへだてた北側に寺を守護する勝軍地蔵があります。

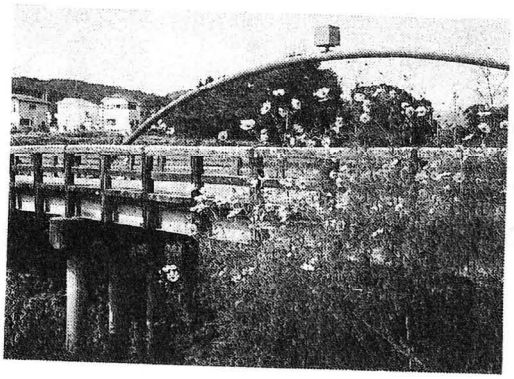
安養寺は犬目山という山号にふさわしく犬目地区六百年の歴史を語りかけてくれます。その上に近代建築の粋をこらした客殿が新築されて、新しい息吹きを加えました。その史跡を一つ一つたどっていると時の経つのを忘れてしまいます。

このほか地区内には新しい宗教施設として延立寺・明観寺・聖クララ修道院があります。また丘陵には二つのゴルフ場のグリーンが広がっています。

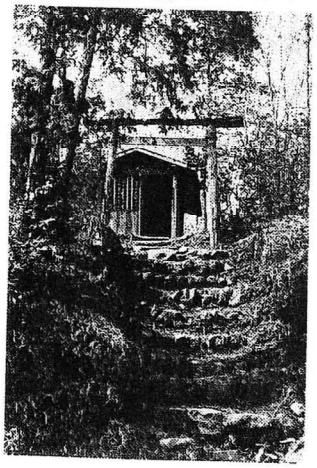
川口地区

秋川街道は川に沿って走り、木材、薪炭、生糸、野菜など八王子市街へ運ぶ道で、以前は五日市街道と呼ばれていました。この街道によって文化や人の縁の往き来もありました。

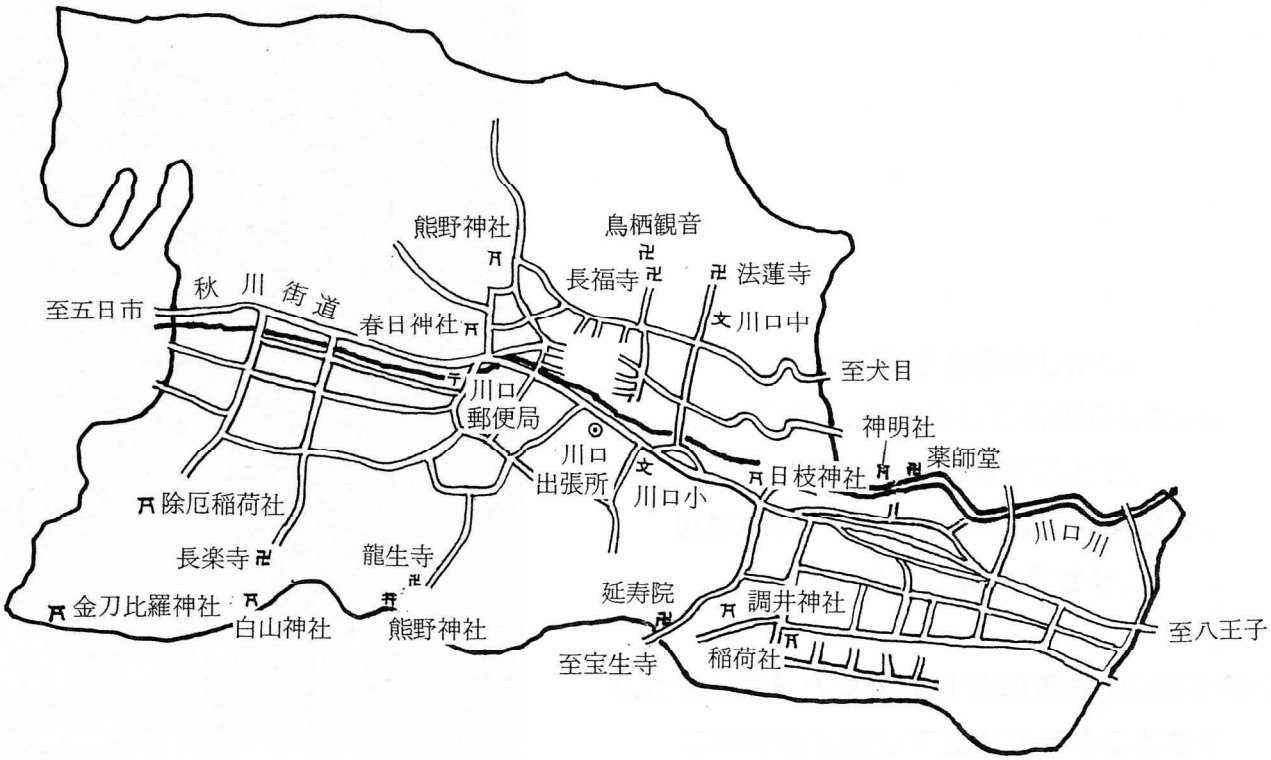
秋川街道から橋を渡って十内入へ向かいます。この橋はこの辺でも珍しくなった木橋で、河岸にはコスモスの花が初秋の風にゆれ風情を添えています。橋を渡った左側の低地は、昔は大水が出ると渕になって渦が巻いたという六万坊です。六万坊の地名は八王子市内にもあり、やはり水の流れに関わる地名ではないかと、以前秋間健郎氏から伺ったことを思い出します。右手に広がった水田の稲穂は、



十内入橋



金勢稲荷社



川口地区

実りの秋を告げています。田植え直後の早苗田も美しいと思いますがこの季節の田からは豊かさが伝わってくるようです。ゆるやかな坂を登ると十内入の四ツ辻に出ます。この坂が上川との大字境いで西に行くと上川町釜ノ沢へ、また真直ぐ団蔵坂を登ったところに金勢稲荷社があります。

金勢稲荷は氏神さまで近くに住む氏子によって祀られ、川口のどこにでも見られるように正月のお神酒から始まって節分の豆まき、七五三等にも参拝します。特にここの稲荷は子授けの神として霊験ありとのことで、遠方からもお参りにきます。金勢、子授けは願いごとにも通じるといい、社の中には大願成就の旗がいくつも見られ、以前には絵馬等も多く奉納されていたそうです。御神体は縄文時代のもので一メートル六十センチほどの石棒で石質は安山岩です。社の上の台地は縄文遺跡として知られていますので、おそらく何百年間も前の遥か昔、耕作中に畑の中から出土した石棒を貴重なものとして祀ったものでしょう。昭和の初め頃までは鬱蒼(うっそう)としたカシの大木に覆われ昼間でも暗く、夜にはフクロウガ鳴いて恐かったと近くに住むお年寄りに聞いたことがあります。また真夜中に白い装束で婦人がお参りしている姿を見かけたとも語っていました。今でも大木の古株がみられ鎮守の社でもあったのでしょう。稲荷社からさらに奥へ進むと、やがて天合峰と呼ばれる山へと道が通じています。ここが川口町の一番地になっていますが向こう側はもう直ぐ美山町です。来た道を戻り、四ツ辻を東へ進むと滝ノ沢、別所、十二社へ

と向かいますが、かたわらの石塔石仏の中に乗宝印平助の名が見られます。この法印が美山松木地蔵堂の法印で、美山に琴平さまを勧請した人です。この人は近くに住む高鳥さんの今から七代ほど前の人で、位碑なども残されています。石川鉄工所を過ぎると、右川に道祖神と刻まれた約一メートルほどの自然石があります。この自然石は下の方が地中に埋まって道祖の二字だけが続めます。道祖神は部落へ悪霊が入るのを防いたとも、道の神さまともいわれています。

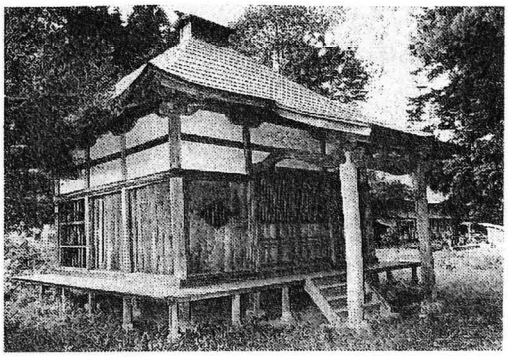
滝ノ沢へと進みますが、工場の影に八王子でも数少ない鎌倉権五郎を祀った御霊社があります。勇猛をうたわれた鎌倉権五郎は梶原景李、大場景親など鎌倉武士の祖ともいわれ、鎮魂のために祀られたという御霊信仰の一つで、他にも将門社や菅原社などが有名です。境内にある池は池ノ尻という字名の源で、ときには鯉など見ることもあります。同じ場所には御獄さまと天神さまがあります。天神さまには学童が使い古した筆なども納めてありました。近くの人には子の権現さまと親しまれ、元旦には氏子がお神酒で祝います。滝ノ沢の道は金刀比羅さまへと続き、江戸期金刀比羅参りで人が多く通ったものと思われます。道すがらには地蔵さまや庚申塔が目立ちます。地蔵さまには、「天明六年八月吉日・念仏供養講中・下川口村滝ノ沢女十三人・世話人長左衛門」、彫りの良い庚申塔には、「安永九年十一月吉日・講中十二人世話人源造」と読めます。秋川街道に近い地蔵さまには、「寛政元年九月二十九日・下川口村滝ノ沢講中十五人」とあり、ここでも世話人は長左衛門と書かれています。そばに壊れた石塔がありますが三面に二体ずつ刻まれた六地蔵は珍しいものです。六地蔵は人を六道から救うという信仰です。滝ノ沢の部落を通りぬけると道は細くなり、杉林を過ぎ、山を登ると川口の金刀比羅神社が山頂に祀られています。麓には土蔵造りの稲荷社があります。狭い境内ですがまたぎ石と思われる自然石があります。十内入の金勢さまと同じに、人里離れたところで子授けを願った人の思いが伝わってきます。

せせらぎに沿いながら杉林を抜けると色彩のあざやかな橋が二ケ所架けられています。その先の道が険しくなったところに滝があり、そのそばには、八王子でもここだけという倶利迦羅不動があります。竜が剣に巻きつきながら、今まさに剣を呑もうとする形像で竜神とも水神ともいわれています。安永五年と明治二十九年に造立された二像です。蝮除けともいわれ、このお蔭で滝ノ沢村では被害がない、と大木満房氏は語っています。また滝ノ沢の地名はここの滝に由来しているそうです。

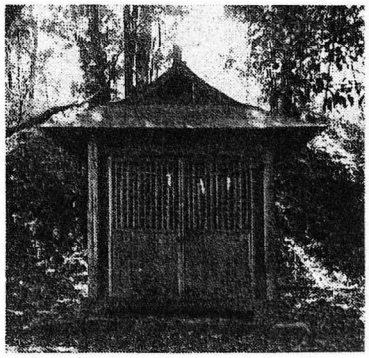
不動から先の道は一段と険しくなり、中腹にある山桜の大木は春には見事な花をつけ、遠くからも眺めることができます。やがて頂に勧請された金刀比羅宮に辿り着きます。この神は海神で、航海安全の神とも竜神に由来しているとも書かれていますが、ここでは金刀比羅と書かれています。春の祭には講中の人達が掃除をしながら山を登り、お参りをします。山頂からは宝生寺団地が一望でき、麓まで埋った人家に眼をみはる思いです。傍には大きな貯水タンクが

あります。団地の水源です。来た道を降りますが、春先でまだ氷がある頃、この谷戸田では早くも一面に蛙の卵が見られるのです。

滝ノ沢から別所へと曲って直ぐ、山裾に馬頭観世音の石塔があります。嘉永二年七月大木氏と書かれていますが、馬が重宝した時代にはこの辺も往来の盛んだったことが偲ばれます。別所の近く左側畑の中に石仏の如意輪観音がありますが、供えられた季節の物を見るとホッとさせられます。別所長楽寺の手前に歳月を思わせる土蔵が並んでいます。馬場さんの土蔵で、「俞印」の醤油は戦後しばらく重宝したそうです。また、この倉は十年ほど前八王子百景の一つにもなりました。さて、その先、森閑とした古杉の中に八王子でも五指に入る長楽寺があります。真言宗智山派で、文治三年開基と伝えられますから鎌倉幕府創草の頃です。ここ別所長楽寺は真言宗布教の拠点でもあったと言われています。長楽寺も近年本堂の傷がひどく改築が待たれます。本尊は不動明王立像で室町期の作です。階段を登ってすぐ、右側にある石塔には光明供養塔と書かれ、宝暦四年十月吉日講中男百二十六人、女三十四人とやっと読めますが、当時としては大変な人数かと思います。時計の文字盤上の刻みは光明真言で風化が進み、指でもわずかにしかたどることが出来ません。



別所薬師堂



別所白山社

薬師堂のうす暗いなかに川口氏が寄進したと伝えられる薬師如来座像が安置されています。鎌倉期の作と言われ、市中一級の文化財であり、都の重要文化財に指定されています。本堂裏には虚空像菩薩がありますが、もとは北ノ根の虚空像山にあった寺が廃寺になったので、ここに移したと古老は話しています。本堂の脇の土盛りは小門墳ではと考えられるのですが未調査です。三界万霊塔の前に並ぶ地蔵は、いずれも首がなく異様な感じがします。十二体しか見られませんが十三仏なのでしょうか。墓地にある見事な五輪塔は室町期のものといわれ、これだけのものを造ることが出来たのはやはり川口氏と考えるのが自然かと思います。

脇の山道を辿ると、山の頂に白山社がありますが、白山、別所については様々な説があり歴史民俗の面からも探究しなければならない課題だと思っています。長楽寺でもそうですが寺院が建てられている位置は現在の場所と違うことが往々にしてあります。同寺の場合も、かってはもっと裏にあったものと推測されます。裏山の中に参道を思わせる道があって、板碑の埋められているのを発見したこともあり、そのままに埋めてあるものも五・六片はありました。

庚申塔を見て長楽寺を後にしますが、数年前、瀬沼静雄さんから

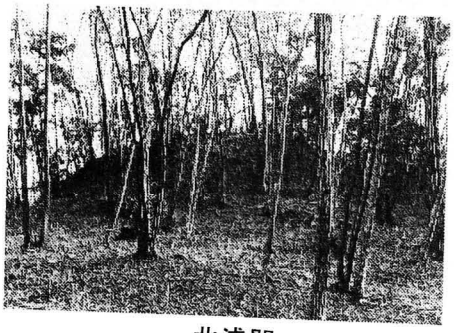
教えて頂いた「花かけ井戸」を見ます。笹薮の中にやっと判るくらいの凹があり、ほとんどが土砂に埋っていました。瀬沼さんは子供の頃三メートル下まで降りることが出来たと話され、小谷田九一老は昔、そこには耳の大きな鰻が住み、十二社の弁天池から来たものだと話して居られました。そんなことを思い出しながら道を戻ります。山裾までくい込むように耕作された水田は文字通り谷戸田で、中世の雰囲気が漂い、別所の景観は素晴らしいと思いました。

別所から十二社へと古道を辿ります。丘陵の麓に開かれた集落には今訪れた谷戸田の風景が残されています。道の脇を流れていた小川もコンクリートの廃水溝に変わって田園ののどかさは薄れてきましたが、これも時の流れでしょうか。龍正寺の入口には、自然石の三界万霊塔と地蔵さまが出迎えるように立っています。入るとすぐ一丈もある真新しい石柱が建てられていて、「曹洞宗龍正禅寺」と独特な書体の文字が眼に入ります。正面に本堂が、ひそやかななかに禅寺の風格を漂わせながら建てられています。本尊は釈迦如来で慶長年間、熊野神社の別当寺として建てられたそうです。山村の多くの寺院がそうであったように、ここにも明治の初期、寺子屋が設けられていましたが通って来る子供達は十人程だったそうです。

龍正寺の奥に丘を背負い、池を前にした静寂のなかに熊野神社があります。十二社とは、天神七代、地神五代の神々を祀った十二所権現からきた地名でかなり多いものです。十二所には熊野神社があり、その掲額の書は山岡鉄舟のもので、上川熊野神社にも同じ物があります。境内には日露戦捷記念明治二十七、八年と書かれています。傍には神薬堂があり、戦後二十四、五年くらいまで春の祭礼には神楽も奉納され、店も並んで賑かなものだったと、その日を心待ちにしていた頃の思い出を、金子美信さんから聞いたことがあります。神楽堂の前には、池が静かに水を湛え、池の中には弁天様が祀られています。池の水草の間を魚が群れて泳ぐのを見ることもあります。傍の立札に昭和五十三年に金魚二百、鯉を百匹放したと書かれています。山の狭間の森閑とした雰囲気は、四季それぞれに素晴らしいものですが、ことに早春の風景には忘れ難いものがあります。

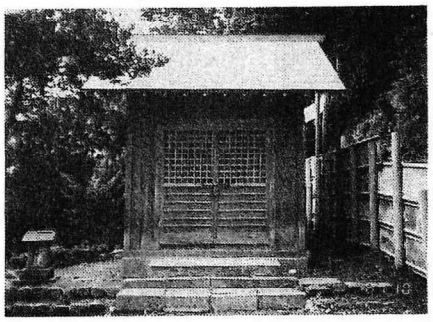
道を戻って右に折れると、すぐ本下坂に出ます。八王子城落城の折り、落武者が首を下げて通ったところからこの名があり、祝い事のときなどは、この道は避けたと言われます。ここで狐火を見た人もいますが、ごく最近まで狸が出没し、そばに飼育されていた七面鳥の雛を襲ったそうですから狐火も本当かも知れません。その七面鳥飼育場も、つい先頃スポーツセンターに生まれ変わりました。露地にはこの地方には珍しい第六天と彫られた自然石があります。第六天とは、魔王であるといわれています。

この道から川口出張所を左側に見ながら進むと、やがて川口小学校の裏に

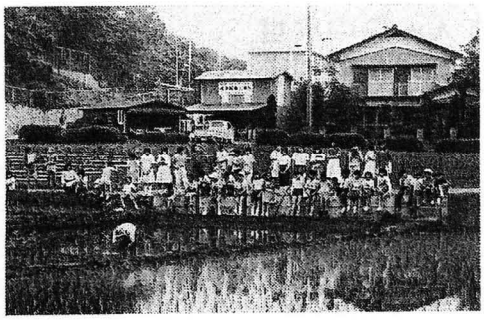


北浅間

出ます。そのなだらかな丘が重要文化財ともいわれる縄文時代の「子抱き土偶」を出土した宮田の畑です。その先、雑木林の中に、専門家の間で古墳ではないかと議論されている浅間塚があります。谷戸をはさんで、向こう側にもう一回り大きな南浅間があります。川口のものは北浅間の名で呼んでいます。美山町の村田貫二氏は二つの塚を詳細に研究され、古墳であるとの結論を出しました。氏によれば陪塚もあったといわれます。ただ、土器、土師器等の出土がないところから疑問視する人もあります。もしこれが古墳であれば、これこそ川口の宝物で、古墳公園が出来ればハイキングコースとしても最適ですし、昔懐しいトテ馬車でも通らせたら、などと夢のようなことを考えながら坂を下ります。学校裏のアスレチック的な公園の向かいの樹木に囲まれた丘の上に出ます。芝生が植えられ、手入れの行き届いた台地の中に忠霊塔が建立されています。この大きな石碑も戦後すぐ土中に埋められる運命にあいました。人影もまばらな静かな



調井神社



田植を見学する小学生

大地から、忙しく往来する秋川街道の車を見ていると別の世界にいるような気がします。すぐ下に耕作されているのが宮田の水田で、水源は先ほどの浅間尾根の近くです。街道近くの水田はこの春埋め立てられてバスの折返場になりました。昨年まで先生に引率された小学校の新一年生が、田植を見学していましたが、そんな光景ももう見られないでしょう。

街道に添ったその先、コンクリートの坂を登ると、調井の丘です。坂の入口には、長者井戸の謂れと川口兵庫助館趾の案内を記した石柱があります。上の広い台地は、畑でしたが人家が並び、やがて館趾も判らなくなるのではと、昭和五十六年に連合町会の有志によって記念碑が建立されました。八王子でも屈指の記念碑です。

（川口兵庫助については別記します）

台地のなかを貫抜いている道路は、やがて下り坂になり、朝晩美山町、宝生寺団地の方面からの車が多く、すれ違うとき難渋します。台地は榎木、丁字屋さんの所まで続き、一旦切れますがすぐまた丘が続きます。道は下の団地を見降ろしつつ丘の端を辿りながら唐松で秋川街道に合流します。

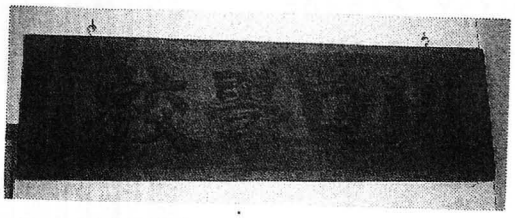
多少前後しますが、調井の丘南端には調井神社が杉の大木に囲まれ、忘れられたように鎮座しています。杉の大木は恩方方面からも望まれます。

また以前に丁字屋さんの裏に石組み遺構があったと伺ったことがあります。近くの宮崎一郎家の裏側台地から先年積石塚古墳を発見

しましたが、おそらく台地上に造営された墳墓だと考えられます。このような積石塚遺構は北浅川を見降ろす河岸段丘上に点々と続き、鹿島古墳群に連なる古墳時代の遺跡です。代表的なものとして協和ブロック敷地内から発見された古墳があります。刀剣等の副葬品の出土が史誌に記録されていますが八世紀後半渡来人の墳墓でしょう。

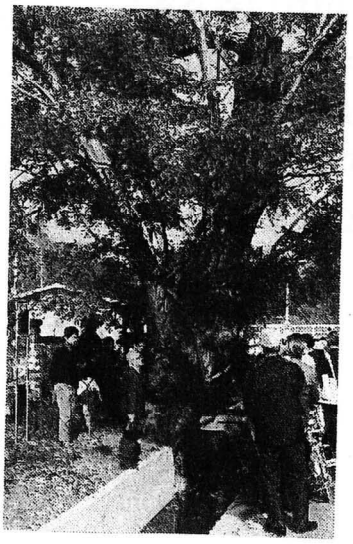
次に、秋川街道を上(かみ)に向かって上り、周辺の歴史文物を訪ねて見たいと思います。

桜株から榎木に至る五丁ッ原は、水の便が悪いことから、つい近年まで人家が少なく、昔は唐松十三軒といわれるほどでした。当時とすれば真直な広い道は、坂本登名蔵の着想と実行によるもので、坂本新道と呼ばれていました。上榎木、米山氏宅近くの坂は、今はゆるやかな坂ですが、往時は急坂で下から荷車を押し上げる駄賃が一回二銭だったとの話も残されています。近くには、馬力引きや行商人の木賃宿の松坂屋があり、戦後もしばらくは店を継いだ人が氷水などを売っていたといいます。最近出た『資料館だより No.三十一』には、明治二十年代にこの周辺の農家の「千刃」を修理して歩いた人の記録が掲載されています。



川口小学校玄関にある額

川口町の中部は、小学校、出張所、農協等が集中していて、川口町の中心になっている感じがします。川口小学校は学童数の急増によって、改築を重ねましたが、木造から近代的な校舎になったのは、二十年ほど前のことです。この川口小学校の玄関には、二メートルくらいの板に立派な字で「川口学校」と書かれた額があります。書家は巌谷修で、巌谷小波(さざなみ)の息子さんです。巌谷小波は小川未明とともに、児童文学の草分けとして活躍した作家で、多くの読者に夢を与えました。名作『こがね丸』をなつかしく思い出される方もあるでしょう。なお、現在文芸評論家として活躍している巌谷大四氏は修の息子さんです。川口出張所もすっかり近代的な建物に変わりました。それ以前は向かい側にあり、永い間村役場として住民に親しまれてきた旧舎は取り壊され、今はゲートボール場になっています。村の当時を偲ぶ建物が、川口から一つずつ消えていくのはさびしいことです。出張所の隣に川口農協があります。その先、路地を隔てて岩船地蔵がありました。世間を船で廻りながら、悩める人に救いの手をさしのべたというこの地蔵さまも近年傷がひどくなったので、供養をして長福寺へ納めたそうです。台座には天保十五年上川口村、下川口村二村の名が刻まれていました。現在は新しく作られた地蔵が、最近急に増えた車の往来を祠の中から眺



坂本家のキハダ

めています。

街道を上（かみ）へ行くと、川口橋手前に大番場と呼ばれる坂本家があります。番場とは、馬場の地名の転化によるもので、この附近には馬場があったのでしょう。水利、地形等からもそう思われます。大番場といえば坂本登名蔵の名が思い出されます。彼は明治二十年代、三多摩壮士のリーダーとして地方政界に君臨し、川口が神奈川県から東京府に編入されることに反対していましたが、演説中に倒れたのです。四十九歳でした。当時横浜港は外国との重要な窓口であり、生糸の産地であった養蚕農家にとって東京編入は死活問題であったのです。絶対阻止しなければと文字通り命を賭け、演壇上で倒れた坂本登名蔵に民権家の姿を彷彿とさせられます。葬儀の日、故人の偉徳を偲ぶ人達の列は自宅から竜正寺まで延々と続き、その盛大さは今も語り継がれています。学校、役場等の敷地の多くは坂本家の寄付によるものといわれています。同家が番場でなく大番場といわれる由縁です。

坂本家に植えられていた「きはだ」は、生糸の染料にも使われ、養蚕農家の多い川口のモニュメントでもありましたが、近年めっきり衰えこの春伐採されました。街道の遠くからも見られた名木も説明板、記念碑を残すだけとなりました。

時代は下って戦争末期、同家の離れに女性解放運動で活躍した市川房枝女史が万巻の書とともに疎開して来ました。戦後わずかの期間でしたが、村の青年婦女に民主主義を説いたそうです。女史がズボン姿で畑仕事に精を出していた様子を思いうかべる人もいます。

因みに、女史を川口に招いたのは故奥住忠一氏で、生前、「戦争中、東京が危いといわれてよ。何でも偉い先生ということで」と語っていました。氏は保革にとらわれないで人を見る眼力を具えていたというべきでしょう。

明治の北村透谷、昭和の市川房枝と日本の変革期の偉大な思想家が二人までも、この川口に足跡を残していることは誇るべき文化遺産といえるでしょう。

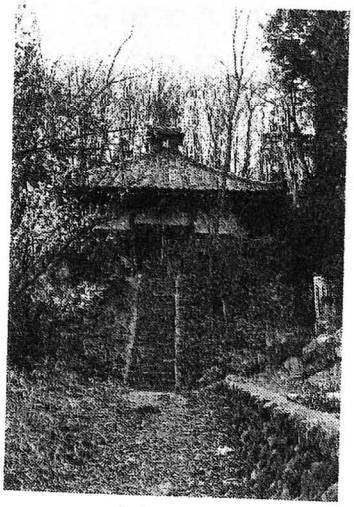
秋川街道影沢バス停に、二基の子育て地蔵が祠の中に安置されています。赤い前かけと供え物が、通勤通学に急ぐ人達の心を和ませています。また影沢橋の手前を右に折れた梅林の中に、忘れられたように石塔があります。川口でも珍しい地鎮塔で、地鎮大権現宝塔とわずかに読みとれ、これもはっきりしませんが安永七年と書かれています。村人が土地の神さまとして祀ったものです。この先の影沢入りには、「死馬捨て場」といわれる場所もあり、こんもりと樫の木が茂っています。今ではほとんど忘れられていますが、昔農道だったことがわかります。

加住南丘陵下の山ノ根道を行く

丘陵の南麓を西へ古道が続き、堀口から北ノ根の四つ辻に石柱道標があります。昭和二年青年団によって建てられたもので、三面にそれぞれの道筋が示されています。西方は戸吹への峠道です。北ノ

根の道沿いに旧家が点在し、遠くからも眺められるエキゾチックな不動堂があり、周りに幾つかの墓石を残しています。慈眼寺跡には鐘乳石の供養塔もあります。傍に部落共有の椀倉が残され、当時の共同体的なものを想像させます。ここから川口中学校裏を抜けて法蓮寺へ至る道も昔が偲ばれます。まず、南八幡が山麓にあります。昔は大社であったのでしょう。周りには杉の大木の切株が残っています。鳥居の傍にある石塔は、馬頭観音でこの道を人馬が往来していたことを物語っています。この少し先にも、もう一つ八幡社があります。明治維新の寺社分離令まで法蓮寺持ちでしたが、現在は部落で管理しています。この八幡様を参拝するためには、法蓮寺脇の細い山道をかなり登らなければなりません。さらに登ると、頂上に出、そこにはブロック造りの虚空像堂があり、本尊が安置されています。この山一体を虚空像山と呼び、樹林に囲まれた台地からは、眼下にゴルフ場の芝生が展がっています。山を下りて麓の田中定七家門前まで来ると、松が枯れはじめているのに気がつきます。この松は三、四百年を経た銘木で、遠くからも眺められた松でした。楢原の一本松も枯れてしまったのをはじめ、最近松の枯れるのをよく聞きますが、今のご時勢、松は生き残れないのでしょうか。

この先が河口山法蓮寺です。二世真教上人が嘉元二年（一三〇四年）に開基した寺で、時宗、遊行派の名刹です。本来遊行派は寺院を持たず布教の拠点を道場と呼んだので、この辺りを道場といいます。また往時の風格を偲ばせる山門と白壁は昔、秋川街道からも見られ、遥か下の方の畑の中に最近まで山門の跡が残っていました。境内には千人同心の遺風を伝える二基の石碑が建立されています。一基は勝安芳題額によるもので、明治二十五年八月に建立された石碑で、原子剛の碑です。上野の戦で命を失った者への愛惜が綴られ、賛同者として石坂昌孝を筆頭に幕末の剣客榊原健吉の名も見られます。発起人としてわざわざ旧幕臣とことわり楠正重、渡辺永重、町田克敬、和田義質、日野義順の五名が記されていますが、このことは勝安房守が官名爵位をれいれいしく書いている事と対照的な感じがします。もう一つは、楠正重翁寿歳の碑で、要旨は官軍が江戸に迫ったとき、我が家は徳川氏の恩顧に報いようと同心の一隊を率いて激戦した…と、その様子が小谷田洞水の簡潔な文章で綴られています。裏には同門であった人達の数十名の名が書かれ、川口に在村した同心が判り、撰文からはこれら同心の気骨と律気な性格が伺われます。また、画才にも優れていた洞水の「十五羅漢」襖絵が法蓮寺に大切に保存されていますが、これだけでも洞水が当時一級の文化人であったことが判ります。なお、戦国の頃武田氏滅亡の折り、松姫と恩方の峠を越えた仁科氏の息女お玉がここに住んでいた部屋も残されています。

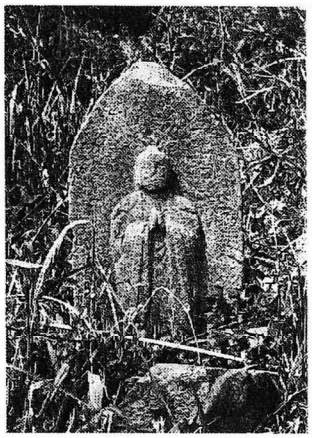


鳥栖観音堂

（注）石碑については㊟に資料を載せます。

五月頃法蓮寺に伺ったときには、境内に植え込まれたつつじが美しく春の陽光に映え、鯉のぼりが翩翻と大空に舞っていました。墓地入口にある一メートル余りの自然石塔は、五日市から八王子西部地方にしばしば見られる鍾乳石ですが、これは土地柄でしょう。「南無阿弥陀仏」と書かれた台座には安政四年十一月一二日、当村道場北ノ根と刻まれており、壇家の範囲を知ることができます。近年裏山も少しずつ造成され新しい墓石が目立ちます。裏山の頂からは川口郷が一望することが出来、絶景です。

法蓮寺のある道場から長福寺までは谷戸を越えるとすぐですが、この周辺もすっかり人家が立て込んできて、昔の道が判らなくなってきました。萩寺として有名な長福寺は「真言宗智山派鳥栖山長福寺」で本尊は不動明王です。長福寺持ちの鳥栖山観音堂は千手観音を厨子内に納めてありますが、伝承によれば上川口円福寺附近から移り、たび重なる戦火にも無事だったことから、火防せの観音としても信仰厚いものがあります。観音堂は八王子市内でも最古のものといわれています。仙台伊達家との縁の深い住職によって、萩が植えられ、萩の寺としても有名で季節には歌会、句会がしばしば催されます。



古道に佇む石仏

長福寺から眺められた池や水田も今はダイヤタウンとして生まれ変わり、昔水田地帯だったことを想像することも出来ません。

ダイヤタウンの奥になった片井戸へは、鳥栖観音堂の下にある辻を西方に辿って行きますが、その辻の角には六地蔵が並び、その中の一基、念仏供養塔の台石には「下川口村片井戸□永七年九月吉日念仏供養講中」とあります。片側の庚申塔には「享保三年十月二十六日」と書かれています。この道を通って片井戸を抜けると、春日神社のある宮ケ谷戸に出ます。昔は古道として人の往来も賑かだったのでしょう。路傍には石仏等が見られます。（ここの地蔵はどういう訳か、背中に指が入るほどの穴が開けられています）集落の中ほどには熊野神社が鎮座し、稲荷社もあって部落の信仰を集めています。ただ、人家が立て込み、通りからは気がつかないようになりました。なお、境内には北ノ根に見られたように、椀倉も残されています。

片井戸の道はやがて春日神社の前を通って山裾を抜け、影沢へと通じています。一方、戸吹への道はゴルフ場へ突きあたりますが、昔は重宝したものでしょう。傍の水田は休耕していますが、土手の草むらの中に馬頭観音と思われる石塔がひっそりと立っています。その当時の情況や造立した人たちの心情を思うと世の移り変わりの激しさを今さらのように考えさせられます。

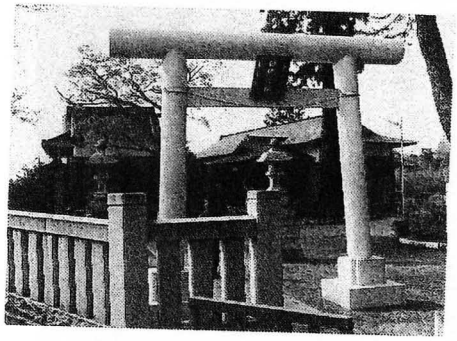
川口でただ一つの春日神社境内には、熊野、山王、稲荷の各社があり、そばの石柱には「武州多摩郡下川口村宮ケ谷戸村三峰稲荷、

宝暦十一年十一月吉日」と書かれています。宮ケ谷戸の地名は春日神社によるもので、「お春日様」と近隣の人達に親しまれ、祭礼にはお神楽の奉納もあり、店も出て賑ったといわれています。春日神社の社殿には俳句の奉額（六十センチ×二メートル）がありますが、同じ俳句の奉額は他の寺社にもしばしば見られるので、当時この地方では俳句が盛んだったことが判ります。文字も判りにくくなっていますが、太白堂系のものでしょうか。

春日神社のそばの林からは、縄文土器の破片を拾うことができ、数千年前の縄文時代の集落が想像されます。初秋の頃には南側の土手に彼岸花の群落が見られます。生命力の強いこの花は川口のどこにでもみられますが呼び名も多く、墓花・狂い花・死花・ハコボレ等々百以上もあるそうです。でも、「赤い花なら曼珠沙華」の名前が一番ぴったりします。

秋川街道のバス停「榎木」を北に向かったところ、老杉に囲まれた日枝神社があります。出雲系在地神である大国主命が祭神で、川口の総社として崇敬を集めています。社務所や鳥居も新しくなり、境内をめぐる玉垣には氏子の主だった人達の名前が朱書きされています。これはこれで百年も経てば郷土史家考究の一つの資料です。境内の入口には説明板がありますが、それには、大変古く由緒のあることが書かれています。しかし、そのことにより興味を引かれるのは周辺に古代の住居跡があったことです。川口川の流域で地形からみて弥生から平安時代の集落があったものでしょう。また、神域であったためかケヤキの自然林が残されていたのですが、近年なくなり惜しいことをした、と教えてくれたのは斎藤三男氏でした。近くには榎木台団地が造成され、景観もすっかり変わりました。対岸に植えられた梅林は三月から四月にかけて満開の花を咲かせ、川口郷に春の香りを漂わせます。その頃黄色い帽子をかぶった新入生が先生に引率されてくるのに出会いますが、こんな時には成人して親元を離れていった子供達のことをふっと思います。

山王橋を渡って堀口へ進みます。



川口町日枝神社

河合宗兵衛さん

穏やかな秋の昼下り、山王橋を渡って河井さんのお宅を訪ねました。庭には色とりどりの花が咲き乱れ、八十一歳の四代目宗兵衛さんは笑顔でおじいさん（二代目宗兵衛さん）の話をされました。

宗兵衛様（さん）入り

川口を中心に近郊の農家から、河井さんのところへ仕込んで欲しいと子弟を連れて来た。子弟は裏の男部屋に寝起きする。朝は四時半に起き、丁字屋さんの裏の辺にあった共有地へ草刈りに行く。これを朝草という。おじいさんは馬に乗って畑を見て廻り、

一日の農作業の計画を立てる。朝食（米三分と裸麦七分のごはんにたくわんとお汁）後は、おじいさんの指示通り作業をした。刈り取った草は、馬の飼料と堆肥作りに使う。昼食後は必ず一時間昼休みがあった。夕方は少し早目に仕事を終わらせ、皆庭先で力だめしをした。これは五貫とか十貫の俵のかつぎっこで、最高は二十貫だったそうだ。また、庭を逆立ちして廻ったりした。こうしているうちにだんだん体格が良くなって来るそうだ。また、おじいさんは免許皆伝の腕前で剣道も教えた。夕ごはんは七時頃からで、その後は藁をたたいて縄をない自分達の草鞋や足中草履作りの夜なべ仕事をした。夜学へ行く子は八時頃から法蓮寺の小学校へ出かけ、小さい子にはおじいさんが勉強を教えた。

宗兵衛づくり

宗兵衛農業の基本は土造りにあるため、堆肥作りには大変な努力が払われた。青草に馬の寝藁・馬糞・落葉等を混ぜ、四～五年経ったものを使った。このようにして作った堆肥は非常に高温になるので、普通は必要とする堆肥消毒もしなくて良かったそうだ。出来上がった堆肥を一反分庭に出し、その中に裸麦の種を入れかくはんし、畑に一つかみずつ蒔く。こうすると麦が平らに出て、根張りが良く収穫も多い。（他の家では、まず堆肥を蒔きその上に種を蒔いた）稲作もつみだといって、種と堆肥を混ぜ合わせ本田へ蒔いた。

宗兵衛頌徳碑建立のこと

それは昭和二十六年四月八日、八王子市地方文化研究会長・橋本義夫さんが突然訪ねて来られ、「河井さん、二代目宗兵衛さんが明治の時代に農業技術の研究に熱心に取り組まれ、大変立派な業績を残され、世のため人のために尽されながら、今日まで陽の目を見ずにいることは本当に残念です。川口村の歴史として、後世にこの偉業を伝えるために、氏の頌徳碑を建立したい」と話されたそうです。こうして橋本さんが発起人代表となり、須崎照義さん（川口村議会副議長）米山誠一さん（川口村下川口）始め近村有力者や篤農家の尽力で、昭和二十七年十月二十五日（宗兵衛さんの命日）に、川口川に面した河井家の土地の一角に二代目宗兵衛さんの頌徳碑が建てられました。工費は六万円で、碑の文章・文字共に橋本さんによるものです。その碑の傍には当時川口村長であった高野林七さんの偉農宗兵衛の碑があり、河井家では今も多くの方々に感謝しておられます。

お天気の良い日には、杖を片手に川口川のほとりを散歩する四代目宗兵衛さんの姿をよく見かけます。ランドセルをしょった子供達に出会うと、優しい言葉をかけられる様子に、みなしごを引き取り我が子同様に養育された二代目宗兵衛さんを見る思いがします。

「宗兵衛裸麦と農家」

草刈るや翁の生家牛の鳴く　小坂　政一

桧笠並んで打てり裸麦　沢田　鶴吉

宗兵衛の碑に青ざしのふと匂う　金子八州男

宗兵衛裸生みの家遺業守りて河井家の

農末代へつづくらむ

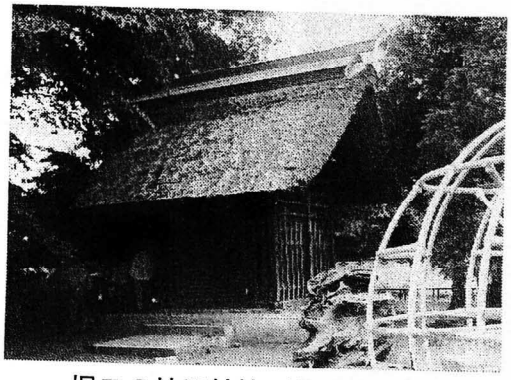
村田　俊雄

（昭和四十九年から五年の歳月をかけて作られた『八王子百景』の画集に収められた作品）

○河井宗兵衛さんは川口を代表する篤農家であるので、紙数をさきました。

堀口神明神社

宗兵衛さんの碑の脇の道を少し行くと、神明神社があります。現在は神明児童遊園となって、子どもの遊び場になっています。創立年月日は不詳で祭神は天照大神といわれ、毎年九月十九日には、今でも氏子によるお祭の行事がささやかながらも行なわれています。かっては、樹齢二百年以上の大きなけやきに囲まれていましたが、少しずつ切られ、家が建て込んで危険ということで、数年前全部切り倒されてしまいました。今は切株だけが十本ほど残っています。鳥居の奥には形の良い切妻屋根の社（やしろ）があります。屋根は以前は茅葺（かやぶき）だったのですが、昭和四十五年と五十六年に改修され、現在は今風の瓦屋根になっています。土台の石も昭和六十一年にコンクリートで固められ、だんだん昔の面影も失われていくようです。



堀口の神明神社（茅葺きの頃）

最近の話ですが、神明神社に古くから伝わる太鼓の皮が破れそのままになっていたものを、氏子の有志による寄付で改修しようということになりました。古いものを大切に保存していこうとする地元の方達の気持ちをとてもうれしく思います。

堀口薬師如来

神明神社から東の方へ少し行くと、薬師如来を祀（まつ）った祠（ほこら）があります。古老の話によると、この神社はおよそ二百六十年以前に建立されたといわれ、昔は御堂があって虚無僧（こむそう）が住んでいたこともあったそうです。御堂は老朽はなはだしく、昭和五十一年に現在の祠（ほこら）に建て替えられました。薬師さまは高さ二十センチ位で金色に輝いて、今なお、鎮座しています。眼病に霊験（れいげん）あらたかといわれ、明治の頃は参詣する人も多く、毎年九月十一日の御開帳の日には、露店商が軒を並らべ、余興に幻灯・説経節・浪花節などが行なわれ相当の賑いだったそうです。つい最近のことですが、賽銭箱に千円札が入っていたそうです。きっと御利益があったのでしょう。

三年前、ここにあった樹齢五百年ともいわれたみごとな松が切り倒されてしまいました。人間の身勝手さに松も無念の思いだったことでしょう。本当に残念でたまりません。

堀口の米山邸

日枝神社から山王橋を渡り、北の方へ少し進み、火の見やぐらのところを左折すると、左手の梅林の向こうに竹の塀に囲まれた米山

邸があります。米山邸は旧秋山国三郎邸で明治十五年頃移築されたものですが、江戸時代に建てられた養蚕農家の造りで豪壮さが偲ばれます。ここには今でも北村透谷の研究家がしばしば訪れます。

丘陵の裾をめぐる古道に史跡を尋ね、風物を眺めながら歩いてきました。秋風にゆらぐコスモスや萩、山道にころがる木の実、忘れられたように路傍にたたずむ野仏、実りの近いことを告げる谷戸田の景観には、山村のたたずまいがわずかに残されていました。これらの古道は散策やハイキングコースに恰好の道では、と思いました。

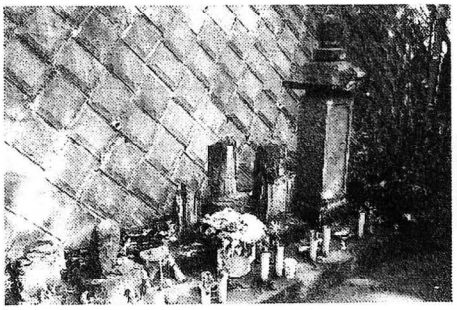
唐松附近

川口村で、富士山の見えた場所を御存知でしょうか。それは黒沢入の稜線と本楢原です。そして西へ唐松までくると山の端にかくれて見えなくなります。恩方の山がさえ切ります。これからお話するのは、川口町の中で、字浅川・下川原・唐松・駒形・臂曲・堀口前というところです。

「唐松十三軒」の言葉どおり、この地域内には昭和三十年代後半まで、ほとんど人家を見ることがありませんでした。この地域は大きな段丘の上と下に分かれ、上は一面の桑畑で、下は北浅川の大増水に備えての雑木林が続いていました。遠く南に丹沢山塊を望むこの地は、川口では野の開けはじめの場所でした。

戦争による食糧事情の悪化は桑畑を麦畑に変えました。そのなかに通る東西一本の道路を五王バス会社の乗合自動車の木炭車が、ゆっくり走っていたというのが戦争中の光景です。

また、その昔、足をたよりに天秤と大八車の時代には、五日市の天然氷を載せた馬車が砂利道を急ぎました。その頃の履物は下駄だったので直ぐに減ってしまったそうです。もっと大昔は、八王子へ出る者は川口川添いの犬目村を通るか、調井から諏訪宿へ抜けていたそうです。これは某郷土史家のお話です。大正の頃まで、追いはぎがたびたび出没したので、織姫達も昼間集団で川口の街道を通りました。この下っぱ（しも）らは五じょう原とか、六地蔵原とか呼ばれていました。五町とは長さの単位で、約五百四十五メートルのことです。桜株以西の道は真直ぐでしたので、その里程を表わしたものでしょう。原のちょうど真中の南端に、川口村の伝染病の隔離病棟が樫の林に囲まれてありました。



唐松の六地蔵

桑の木の害虫である尺取虫の駆除は、桑畑では殺虫剤が使えないので、小学生の手によって学校行事の一つとして行なわれました。

また支那事変の頃、小学生の出征兵士の見送りは、桜株の乗合自動車の停留所までのことが多かったのです。英霊の出迎えもそうでした。バスが来るまでの長い待ち時間に数人連れだって、笹籔の細道を抜けて、北浅川べりの村の伝染病の焼場まで走りました。林の

中の、ただ、土が焼け焦げているだけの場所だったことを記憶しています。

六地蔵は、この地方で「御判刑（ごばんぎょう）」と呼ばれた罪人のおしおきが行なわれた場所で、川口の各地の辻でも見られます。道路拡張の際に地蔵様を移したため、現在ではこの地蔵様を見下ろす形になってしまいましたが、こういった状況をいぶかる声も聞かれます。

地図の上で、川口川と北浅川が接近しているのが堀口前のところです。昭和十二年、十三年の集中豪雨は川口川の流域に大被害をもたらしました。蛇行の始まる前の堀口にダムを作り、その落差を利用して放水路を横断させる計画が有識者の間でありましたが、戦時下のこと、構想の段階で終わってしまいました。これは戦後名高い大水害の伊豆狩野川の放水路に先立つ話です。

堀口前には「大尽畠」というところがあって、この近在の地主がそれぞれ一筆ずつを所有していたのでこの名がつきました。地主への登龍門にはこの地の畠一枚を入手することが先決だったのでしょう。大昔、唐松には法蓮寺の寮がありましたが、今は人家の中です。

調井の坂を南に下った藪の中にある稲荷様の脇の大石は、増水の折り下流から上流へと流れたという石です。高幡不動や拝島の大師様、尾崎の観音様へは当然のことながら歩いてお参りする時代です。自転車だって各戸にあったわけではなく、まして女の人は自転車に乗れませんでした。

八月下旬お諏訪様も近在の人を集めました。調井河原に筏橋が架けられ、日暮れになると、狐にばかされて道に迷う人が毎年ありました。この時期夕立が多く、北浅川の増水を見越して遊び過ぎないよう注意されたものでした。

北浅川の北側は浅川と下川原と呼ばれる広い土地が楢原まで続きます。この土地は主に雑木林で、大方は共有林でした。共有林とは江戸幕府の頃からか住民に入会権を認めて暮らしの成り立ちを助け、民生を安定させ、その収入で部落の道路や橋を保たせ、相互扶助に役立たせる目的があったものと思って頂ければよいと思います。人家にしても徐々にではありますが増えますので、約六十年に一度の割で区画の変更がありました。

下川口はその頃東部と西部に分かれていて、戦時中東西から、中部が生まれました。部落に分けられる共有地が下川原と黒沢入にあって、その時どこの地域がどこを取るかの相談の折り、本当のところ、西部は黒沢入が欲しかったのですが、行きがかり上下川原を貰う羽目になったそうです。何年かに一度は総出で原野の下刈り人足に駆り出されたそうです。

戦時中農林省はこの地に目をつけました。農林省の外郭団体の農地開発営団が軍を後楯にして、半ば強制的にこの地を買収し、食糧増産計画に踏み切りました。勤労奉仕とか、学徒動員、最後には大相撲の力士まで動員して、軍の見張りのもと開墾に力を入れました。確か昭和十八年の初夏の頃、富ノ山力士を先達に楢原分に土俵を築き、一日興業しました。幸い好天に恵まれ、大変な人出でした。

その後入植者を決めてこの地に入植させました。英国では貴族は移民しないという諺がありますが、この地の入植者で最後まで土地を手放なさなかった家は地価の高騰で今は貴族並みの財力です。桜株の道路脇の桜は、道路拡張前のものが二代目であったとの古老の話ですから、現在のものは三代目ということになるでしょう。

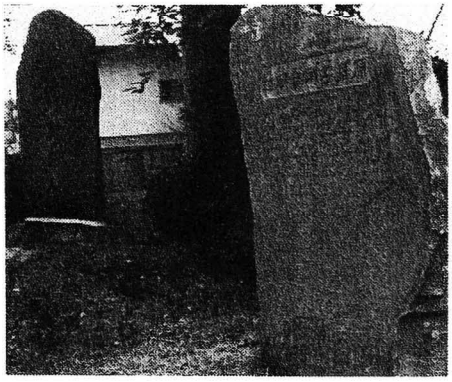
川口町のなかには、多分下川口村と上川口村に分かれた時の置土産でしょうか、下川口時代、上川口の飛地がたくさんありました。ちょうど馬が畑に乗り入れた足跡のように点在しているので、地元では「馬乗」とか呼んでいました。この呼び名は上川口番地としても通用していました。昔は現八王子にもこの名称がたくさんあったそうですが、特にこの地域には多くあって困るほどでした。公式の書類の番地は「上川口何番地」と書かれているため一度上川口へ行ってから回送されるので役に立たない場合もありました。現在川口町の番地の三千六百番台以上の土地はもと、上川口の飛地番地だったのです。今でも不便を感じていらっしゃる方も多いと思いますが、昔はもっとひどかったわけです。

戦時中供出の馬草の干場として使われ往還と呼ばれた川口の街道、それが今は渋滞する車にその場を奪われ、麦畑は麓の競い合いの場となりつつあります。畑はおろか地面さえ見られなくなる時代を迎えようとしています。五町原の街道から眺められた丹沢、高尾山に続く恩方・山入・上川口・奥多摩の連山が見えなくなることは必定です。今のうちに現在の様子を絵に画くか写真に収めて置くと良いと思います。

川口地区（付）

法蓮寺境内にある石碑について

法蓮寺に建立されている二基の石碑は、表面はともかく碑陰に刻まれている名前が、百年後の今日では風化が激しくなっているので、いまのうちに記録を残しておかなければと採拓、調査しました。この碑については、小沢勝美、野口正久両先生が書かれています。特に小沢勝美先生の著書『北村透谷』には建碑に関わるその当時の情況について多くの示唆を含んでいます。



川口を中心に隣村加住、恩方、五日市など三多摩に展がった二百四十名にのぼる大勢の名前に様々な背景が想像されます。

賛成員として、政会を二分した南多摩郡の石坂昌孝、西多摩郡の瀬戸岡為一郎を筆頭に十七年の困民党事件では農民を検束した側の郡長・原豊穣も名を連ね、剣客として名を知られた榊原健吉などが一際大きく刻まれています。遠方では常陸の人、山岡藤助の名が見られます。この人は明治の教育者として語りつがれている人です。また、近隣に知られた人として、引田の仁医海老沢峯章、瀬沼長次郎、瀬沼小太郎、困民党関係として町田克敬、塩野倉之助、秋山増

蔵の名がみられます。塩野倉之助は六年の刑を受け、二十二年の憲法発布の恩赦で出獄していたのです。困民党事件を考えながら目を通していくと、検束者を最も多く出した山入（現美山）の人がここでも多く名を連ねています。注目する人として秋山国三郎がいます。特筆されている発起人五名のなかに町田克敬の名があり、多少違和感をおぼえます。

碑が建立された明治二十五年は、困民党事件の余波も多分に残されている時で、八王子では高利貸しが斬殺され、三多摩壮士が疑われ、秋山文太郎、斎藤寅太等が逮捕されたのです。同じ頃、鶴川村では医師が選挙の裏切り者として殺害され、村野常右衛門、大矢正夫が逮捕されています。二回目の総選挙が行なわれたときで、血なまぐさい年でした。しかし近代産業の勃興期で、由木に乳牛ホルスタインが輸入され、養蚕も盛んになった頃でした。なお、この明治二十五年は北村透谷が秋山国三郎を訪れた最後の年で、不朽の名作『三日幻境』を発表した年でもあります。

追慕して建立された一人の墓銘碑に、立ち場の異なった多くの人たちが賛同していることに、原子剛の人柄が偲ばれます。それにしても消えかかった名前を確かめながら、歳月の重さと歴史の流れを今さらのように考えさせられるのです。

原君子剛墓碑銘

枢密顧問官正三位勲一等伯爵勝安芳題額

君　武照字子剛通称勇号太以堂原氏武州南多摩郡川口邑人　父千人隊士木下武八母石田氏有故冒原氏
君為人忠実廉直自幼読書学撃剣於松崎正作刻苦励精終究其奥　天保四年奉仕徳川幕府補千人隊拝世話役
嘉永三年在江戸城而有命演鎗法温恭公覧而感之賞賜銀若干尋又試撃劒復賞賜白銀五枚六年九月拝組頭
遂以病辞職譲家於男照白而隠焉　君初好俳歌遊太白堂之門至此吟詠優游以自娯　慶応三年有故復出　三
月　和田　渡辺　楠三氏募壮兵隊君先衆往而帰焉　以警衛八王子近邑五月奉幕命属多賀上総介護徳川氏之
廟於増上寺十四日上野之変起君急赴多賀邸会官兵襲撃奮激争闘而死矣　年四十有八葬于法蓮寺先塋之次
追号日剣阿光隠居士　嗚呼若君者蓋千人隊中之義士　天若仮之以年使其志永尽於国事則其所施設亦何如
耶豈可不痛惜哉　君配福島氏生二男一女　長日照白継家次日又次養於山下氏　女先夭　頃同隊士及同志
者将立石勒其事来乞文　余固追慕於君者因不辞而叙之係以銘曰
丈夫殉節　義勇凛然　君骨雖朽　君名可伝
明治廿五年八月　日野義順撰文并書

賛助員

大日本武徳会剣道範士
警視庁剣道師範巡回係
柴田衛守
警視庁師範
長谷川勝治
仝師範
櫻井金八
照本捨雄
高井丹吾
井上才口
井上裕口郎
遠藤七郎

後援者

和田義質
荒井金作
小谷田兵五郎
橋本喜市
瀬沼小太郎
米山五郎エ門
奥住相次郎
河井信太郎
河井宗兵エ
馬場助太郎
木崎菊太郎
町田喜三郎
田中周助

門人イロハ順

井上定一
仝寛二
仝佐十郎
中村房太郎
野口正造
仝米太郎
栗原三蔵
町田喜一郎
福島金次郎
小峯廣博
安達亀一
青木権八
坂木登名蔵
佐藤蔵之助
木下喜代次郎
木住野平治
三澤幸次郎
田中由太郎
久保力蔵

渡辺房蔵
仝九助
仝兼次郎
仝竹次郎
橋木彦次郎
河井仙松
米山小三郎
仝久次郎
仝清四郎
仝寅吉
仝近蔵
高野嘉吉
仝亥平
田中伊三郎

親族イロハ順

馬場佐一郎
小川喜太郎
高山多三郎
高野輔三
竹中浅次郎
立川惣蔵
臼井多吉
臼井由太郎
野口キク
栗原軍吉
楠五郎
楠ミツ
斉藤一三郎
峯尾与七

松本鶴吉
稲橋春吉
斉藤晴良
仝良平
仝重良
高山利助
高山又三
高山弥一
楠房次郎

楠正重翁寿之碑
賛同者名

発起人

米山裕太郎
小谷田弥市

「楠正重翁寿歳の碑」について

この碑は楠正重翁の八十の祝いに先生を慕う人たちによって建立された記念碑です。「江戸幕府存亡の時、我々は二百余年徳川のお蔭で生活をしながら何もしなかった。今こそ、その恩に報いようと同志百余人と共に、江戸へ馳せ参じた。（中略）これぞ武臣の範である。尚、先生は八十歳になっても壮者に貧けないほどお元気である」と

幕府互解の折りに示した多摩人の一徹、律義さを情景が浮かぶほどの名文で簡潔に書かれています。楠正重翁といい、原子剛といい、彼らはどちらも私たち郷土の誇りで、官位などかすんでしまいます。二基の碑ともせめて拓本の写真を入れたいと思いましたが時間がなく残念でした。

上川地区

秋川街道ＧＭＧバス停から黒沢川に沿って北へ三百メートルほど歩くと、左手に円福寺がある。真言宗豊山派の寺で、開基は源実朝と伝えられている。幾度かの火災で焼失し定かなものは残っていない。山門を入るとすぐ左に、「幻境」で知られる秋山国三郎の墓碑が建てられている。

寺に伝えられている般若心経は奥書に「応永卅二年、願主河口兵庫助幸季」とあり、八王子市の文化財に指定されている。また瞽女の巻物がある。これは昭和十五年頃、川口地内に止宿し歩いていた四人連れの瞽女の巻物である。遊芸末期の頃、当時無住であった上川町田守の大仙寺で、先代の桑林精聖さんが瞽女から預かったものと聞いている。桑林さんが大仙寺を兼務していたときのことで、無住の寺におくのを心配して円福寺に保管していた。しかしその後、瞽女さんは、巻物を預けたまま楢原町で亡くなってしまったので、そのまま現在も保管しているとの話である。

この寺、古くは南に向いていたのだといわれている。寺の西北の山を御堂山と呼び、鳥栖観音が祀られていたと伝えられ、火災の時観音様は現在の川口町に飛び立ち、難をのがれたと伝えられている。

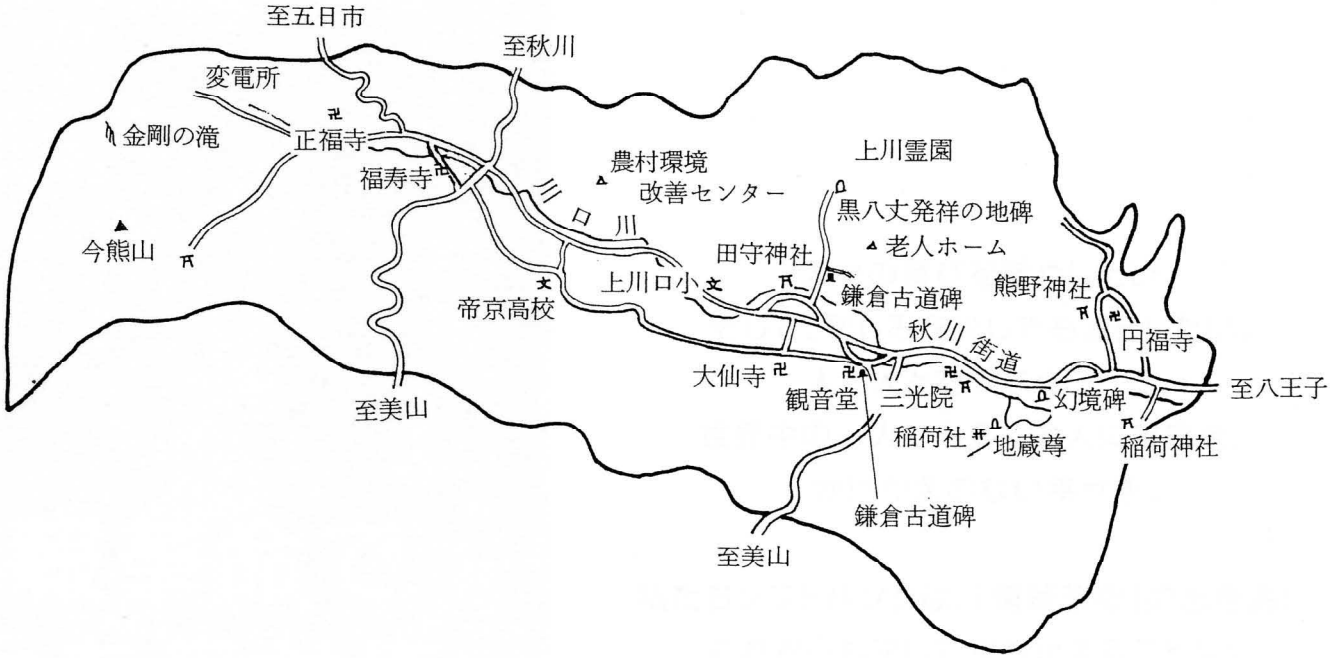
ここから西の方を見ると、現在はＧＭＧゴルフ場となっていて緑深かった昔の面影はないが、西のはずれに孝子の伝説を伝える雹止山があり、当時の場所と多少変わっているものの、榛名神社が祀られている。小さな石造りの祠で、今でも毎年五月三日新緑の芽吹きの時期、お祭が行なわれている。

円福寺西の山腹に熊野神社がある。建立年月は明らかではないが、武蔵七党の川口氏が川口郷の鎮守として建立したと伝えられている。当時、社地三千五百坪を領したといわれているが、川口氏と共に衰頽の一途を辿り、明治初年上川町日向の天王宮に合祀され、現在では、小さな社が木立の中に訪れる人々を待つように鎮座している。

そこから新しく切り開いて出来たＧＭＧ入口通りを秋川街道へ出る。西に少し歩き、右へ旧道へ入り、また右に曲る坂道を登ったところに秋山家がある。北村透谷と親交のあった秋山国三郎の『安久多草紙』と透谷から国三郎に宛てた年賀状が保管されていて、秋山国子さんにお話しすれば見せていただける。

来た道を旧道にもどり、西へ秋川街道に出たところに上川町東部会館があり、道路沿いにある「幻境」の碑の前に出る。幻境碑の向かいの田の向こうに秋山得吉宅が見える。秋山得吉氏は国三郎の祖孫で、今の家は建替えられている。しかし古くは旅館で、南側旧道沿いにきれいな川口川が流れ、川沿いに竹やぶが続いて、川面をあひるが仲良く泳ぐ静かな地だった。現在は川も改修されて南に変わ

榛名神社



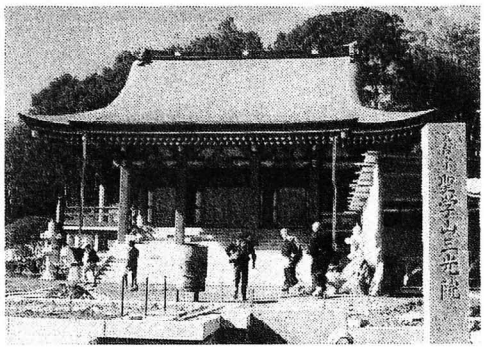
上川地区

り、道路も新道となり、家も増えた。このように透谷、国三郎親交の幻境の地も今では昔の面影はない。

東部会館東側の小道を南側へ東釜之沢橋を渡り、小高い畠道へ出る。この附近で、幻境の地、森下地内が眺望できる。北側の山の斜面に山桑を植え、山まゆを採ったり茶の木を植えたといわれ、国三郎がいろいろな面に働いていたことを偲ばせる。畠道から舗装の道へ出て、左に折れたところに石柱の三面にきれいに彫られた浮彫りの地蔵様が、道行く人を見守るように建てられている。石柱には嘉永四年とあり、釜之沢村女人、森下村、他の女人講の名が見える。おそらく当時の女衆が念佛講を続け、家族、村の安全を願ったものだろう。そこから東の十内入方面に明官橋が見える。古書にでてくる橋名でその当時利用の多かった古道だったのだろう。

北へ釜之沢橋を渡り、秋川街道に出て西へ二百メートルくらい左に入り日向橋を渡ると、現在でも日向の天王様と親しまれている熊野神社が

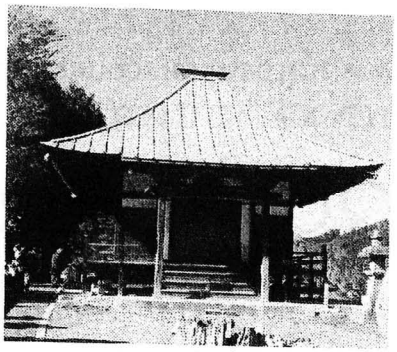
午頭天王燈籠


三　光　院

ある。入口鳥居の際に、「牛頭天王」と刻まれた石燈籠があり、社殿内に「疫病除」の板額が残されている。天王宮の建立は明らかではないが、慶長二年大洪水で流されてしまったと古老は話してくれた。明治初年黒沢の熊野神社と合祀となり、熊野、八雲社と改められ、村社となった。戦前は九月二日秋祭りが行なわれ、芝居や歌舞伎など地元青年は二日も三日も舞台作り等に働き、祭りをにぎやかに盛上げたものである。

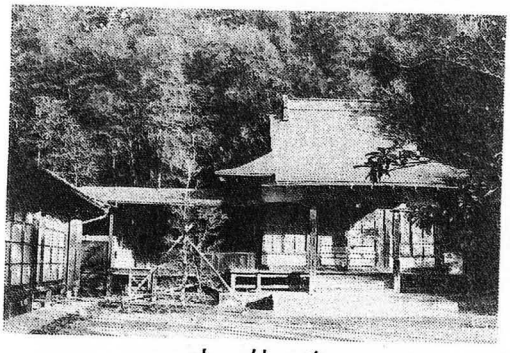
その南に三光院が見える。創建は永徳年間といわれる天台宗の寺である。現在の建物は昭和五十五年の建立で、近在にないすばらしい寺である。以前この寺はすぐ西側の高台にあり、老朽のため取りこわされた。

ここから秋川街道にもどり西へ歩く、新しくできた美山町方面への戸沢峠の入口、上川橋を左に見ながら、西へ四、五十メートル、左へ斜めに旧道を入り、関戸橋を渡ってすこし行くと、左に折れる鎌倉古道に入る。ここは戸沢峠道の名残りがわずかに残されている場所である。すぐ右側に「鎌倉古道」の石柱が建てられている。右側に観音堂が見える。右に農道を入ると、お堂の庭に出る。この観音堂は天正年間、甲州の家臣水島将監が建立したものと伝えられている。本尊は馬頭観音で、三光院の別当となっている。


戸沢の観音堂

観音様から農道を西へ三百メートル程度行くと、落成間近の大仙寺がある。参道の右手には、大株のつつじが植えられている。五月頃はこのつつじが真赤に燃え、道まで溢れ出るようだ。また境内には、春になると蛙合戦の行なわれる池があり、最近、天然記念物のモリアオガエルも棲むようになった。この蛙は必ず下に水がある高い木の枝に卵を生むといわれ、実際に池面に張り出した枝に卵が見られる。入口のところには、重忠のお手植の桜と伝え聞く古株があり、花吹雪が池に、また地蔵様に散りかかる頃の光景は大変風情がある。

鎌倉古道を見下す地点に位置する大仙寺は、争乱の世にあっては、重要な砦であっただろうと専門家は話す。この寺は、古くは八王子城攻略の折り、焼打ちにあったのを始め、その後も明治、大正と焼けているので古記録はない。現在新築されている本堂が昔の位置方位だといわれている。真言宗の寺で、本尊は不動明王である。何回もの火難にも本尊だけはもち出され、焼失をまぬがれたという。また左入部落にあった薬師堂も、都道の拡張工事のため、境内に移築されている。


大　仙　寺

ここから長い参道を下り、秋川街道を横切ると旧道につきあたる。

ここが大仙寺の入口で、西側に剣の塔があり、「田守山大仙寺」と書かれてある。しかし古くは「成田山大仙寺」だったのを、先々代住職の桑林慈聖師が「田守山」に改めてしまったそうである。向かい合って百万遍供養塔もある。その東に上川中部会館があり、左に折れると日光東照宮を思わせるような朱塗りの橋がある。この反り橋を渡ると、杉木立の冷えに思わず襟を正したくなる。正面に田守神社が鎮座する。この神社は、もと古明神（東の方）といわれる地にあったのだろうといわれている。古老の話によると、畠山重忠が鎌倉へ行く途中、守り本尊をたもとから出して村人に授けたといい、それを田守神社に祀ったもので、「たもと神社」であったが、いつか訛って「田守神社」となったのだともいわれる。また一説には、重忠が行軍の途中この近くで休んだところ、兜の鉢から守り本尊を紛失し、それを村人が拾い、神社に祀ったものともいわれている。どういうわけか、その後、五日市の悲願寺に御神体が移ってしまったという言い伝えがある。また以前、田守神社は大仙寺もちで、大仙寺が無住のとき、悲願寺が管理していたこともあったという。

今は神社境内も、上川中部公園として開放され、ゲートボール等、多くの人々のふれあいの場として親しまれている。毎年八月の最終日曜日には、町民祭の場として獅子舞が行なわれる。雨乞い獅子、喧嘩獅子で知られているもので、これは市の文化財に指定されている。

そこから北へ鎌倉古道に入る重忠橋を渡る。「八王子同友会」の入口に「鎌倉古道」の碑がある。ここを右に折れ、小さな金山橋を渡る。ここの道が鎌倉古道といわれ、金山橋も古書にでてくる橋名である。すぐ左上に金山神社がある。すぐ近くに五輪塔もあり、その先の関場部落に三沢家があり、家号を「かじや」といい、古くは野鍛治をしていたといわれ、三沢家で金山様をお祀りしたものと思われるが、現在では近くの高野家でお守りしているという。大きな樫の木があり、冬の日に光る樫の実を拾ってみる。ひととき童心にかえる思い、切である。

そこからもどり、古道北の秋川方面に上川霊園があり、入口のところに「黒八丈発祥の地」の碑が建てられている。この近くの土が黒八丈染めに使われたといわれている。その先、尾根道を網代方面にゆくと、川口地区を越えるが、古道沿いに「重忠の駒止め石」があり、山桜の季節には新緑と共に散策を楽しめる尾根道である。

秋川街道にもどり、西へ行くと上川口小学校の東側高台に、秋山初男家がある。自宅の西、上川口小学校との境のところに秋山家の墓地があり、板碑が数基建てられている。その中に「月待板碑」があり、これはきれいに残されていて、「文明十七年十月二十三日、月待供養、一結衆敬白」と刻まれている。破損したものがあるものの全部で二十個もあり、これだけまとまってあるのは珍しく、この地に豪族のいた証拠だといわれている。

秋川街道に出て、西へ小学校を通り過ぎて、久保橋を渡ると、左手に帝京高校、右手に農事センターが見えてくる。牛頭（ごず）橋を渡り、

農事センターの西側に小社があると聞き、訪ねて見たが、今は礎石らしいものがあるだけだった。久保家でお守りしているというので「牛頭天王」ではと思い、聞いて見たが確かなことはわからなかった。

秋川街道を西へ糀谷橋を渡り、羽生入橋を左に折れ、南へ歩き、山道に入る手前を右に行くと、福寿寺へ着く。臨済宗の寺で、開山は元亀元年といわれ、建長寺派である。建長寺派の寺は八王子ではこの寺だけという。現在の本堂は昭和五十二年建立されたものである。

ここから秋川街道にでて西へ行くと今熊神社の鳥居が見える。鳥居際に「今熊神社参道」の石柱が目につく。そこから三百メートルほど行くと、右側に「正福寺入口」の道標があり、古い造りの正福寺本堂につく。本堂と向かい合うように神楽殿造りの建物がある。真言宗豊山派の寺で、今熊別当寺として栄えた寺である。「今熊山」は「よばわり山」として信仰を広め、参拝者でにぎわったのは、この正福寺にあったといわれている。寺のすぐ西側に、小さな祠だが、熊野権現社がある。この権現社を今熊山頂に奉祀し、時の住職鳳明師は、人足を雇い、朝おさい銭をカマスに入れて背負上げ、晩に背負いおり、いつでもおさい銭がいっぱい奉納されているようにしていたと伝え聞く。また八王子市文化財に指定されている獅子舞も、この正福寺に伝えられたもので、町民祭にはこの庭でも獅子舞が行なわれ、獅子頭等も正福寺に保管されている。

ここから今熊山参道に出て、奥へすこし行くと、左側に高い石垣の家がある。ここが田中宅で、市指定天然記念物のきりしまつつじを見せてもらう。開花時にはすばらしい枝ぶりに、いっぱいの花をつけ見事である。

参道にでてすこしゆくと、二又道になる。右に入ると、東洋一といわれている変電所があり、変電所の南側の道を奥に進むと、変電所の終わるところを左に入る山道がある。ここは今熊裏参道、金剛の滝への道となっている。

二又道を左へ行くと、表参道から五分くらいで、現在の今熊神社につく、そこから山頂に向かう参道は、最近はかなり荒れていて歩きにくいが、ゆっくり歩いて三十分くらいで山頂につく。

昭和十七年の山火事で、社殿、客殿、神官住宅も焼失、「よばわり太鼓」は山頂からころがし落として無事だったという。現在、山頂のコンクリート社殿は、地元の人が砂利、砂、セメントを少しずつ背負いあげて造ったもので、当時の苦労はたいへんなものだったろう。

今熊神社については別稿とし、山頂を下りながら多くの石柱を見る。住所と名前が刻まれていて、かなり遠くからの参拝者のあったことをう

今熊山頂の本殿

かがい知ることが出来る。展望台のところでは、五日市町が一望出来、すこし下にある展望台からは秋の天気の良い日なら、新宿の高層ビルまで見ることが出来る。さらに下ると新殿のまわりには、最近、川口地区社教で植栽したつつじがたくさんあり、開花時にはすばらしく咲き競う。

美山地区

緑深い静かな山入村だった美山通りも、砕石場の出現により、ダンプの行き交う街道となっている。

下恩方と境する小津川にかかる「あかね橋」から、農協美山支店前を西へ、北側に老人ホームを見ながら萩園バス停につく。そこから北側に入る道を少し歩き、山入川にかかる橋を渡る。

北に山を背負い、大きな松の木の枝ぶりを豊かに石垣から突き出して、その昔を偲ばせてくれる乾晨寺につく。禅宗の寺で、開基は大石遠江守と伝えられているが定かではない。本堂は昭和二十年八月の戦災で全焼、焼失を免れた山門は痛々しい戦跡を残している。入口に建っているお地蔵さんは、今でも前だれとぼうしをつけて当時の人々の信仰を伝えている。

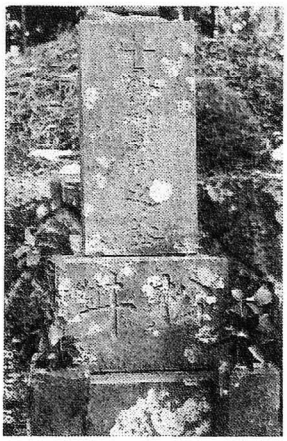
乾晨寺から美山通りにもどり、さらに南へ行くと、下恩方町の辺名にぬける道に出る。鎌倉古道といわれている道で、愛する女を他の男の嫁にとられた男がその嫁入行列を襲い、嫁を奪って心中して果てたという悲恋の伝説を残し、「恋沢」の地名を伝えているところである。

住宅地から恋沢の山道にかかるところに、地蔵堂があり、花や果物などが供えられ、真新しい前だれ、ぼうしをつけたお地蔵さんが地域の安穏を見護っている。

恋沢をあとに美山通りにもどり、西へ三百メートルくらい歩くと右に山入川の流れが街道に沿ってわん曲しているところに出る。そこを左に折れて入ると御屋敷通りである。間もなく左に平川病院、右に松井氏宅となる。ここは蘭学医松井玄同の生家で、平川病院側の小高いところに墓所があり、石塔に十字架が刻まれ「医祖玄同之墓」とある。

そこからすこし奥に進むと、左手を山にすこし入ったところに「茶の木稲荷」がある。小さな祠があり、昔、茶の木の下に狐が死んでいたのを村人が祀り「茶の木稲荷」と名付けたと古老は話すが、以前から稲荷社はあったものではないかと思われる。社地には珍しい杉の古木がある。この杉は普通の杉と違って枝が太く林立しているもので同種類の杉が八王子城に何本か見られる。

そこから薬師堂に向かって歩く。道端に庚申塔があり、左側の一段高いところに薬師堂がある。創立年月、由緒もわからず、建物も荒れ果てている。その向かい



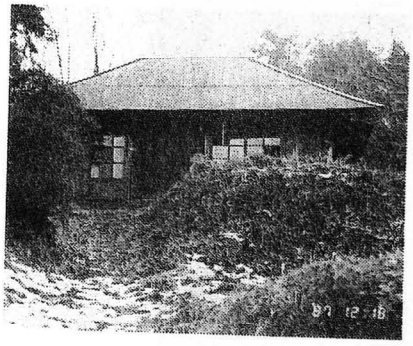
医祖松井玄同之墓

美山地区

側、堀を隔てて、昭和四十六年に陶芸家吉田氏が「御屋敷窯」を開窯している。

この近くが「御屋敷跡」だと地元の人はいっているが定かではない。近くから古い陶器などが見つけられている。また近くに小さな祠があり「乳母神宮」といわれていると地元の人はいい、その奥に「殿畠」と呼ばれている場所もあると話してくれた。この辺りに来ると山は急に高くなってくる。南側の高い山頂に、社地百二十坪の内に琴平神社社殿がある。社地には以前老松もあったが、台風のためすべて吹きとばされてしまい現在は何もなく、参道登り口に鳥居だけが淋しく建っている。

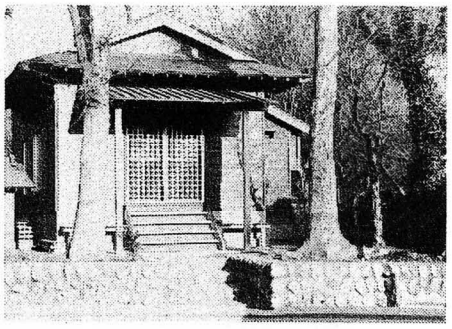
御屋敷から美山通りにもどり、西へ「まつき橋」を渡るとすぐ右側に地蔵堂がある。最近地元の人達により改修されて、きれいな建物になり、木の坐像のお地蔵さんが祀られている。また敷地内には石仏も数基あり、閻魔大王の石仏もある。この堂の前の砂利道を北寄りに西へ進む道が戸



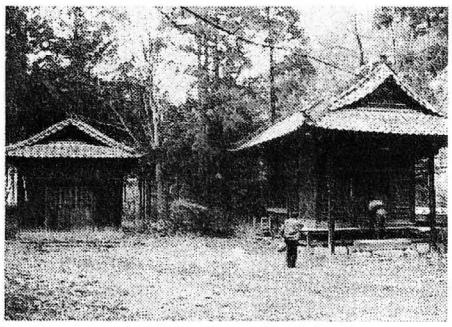
御屋敷の薬師堂と庚申塔

沢峠へ通じる旧道である。ここから新道を西へ少し歩く。右へは戸沢峠道、間もなく美山小学校を右手に見ながら、栗瀬橋を渡り左に入ると、小名、鹿の子沢に、新義真言宗の大光寺がある。寺方村宝生寺末の寺で、創立永禄八年とされているが戦災で焼失し、現在はコンクリート造りのモダンな本堂である。この奥に砕石場があり、ダンプの行き交う道となっている。

美山通りにもどり、西へ瀬東橋を渡るとすぐ、右側の路傍に地蔵堂がある。地蔵堂のすぐ北側山裾に、美山小学校の前身、山入小学校があった。その以前は明福寺という寺であったと聞く。この寺は、



松木の地蔵堂



日枝・王室神社

真言宗で宝生寺持、明治初期宝生寺に合併し廃寺となった。

そこから西へ、山入川沿いの道を歩く。左側に砕石場、右側に砕石場跡を見ながら仲井橋を渡ると右側に小高い森が見えてくる。

やがて、日枝、王室神社につく。鳥居の際に、文字庚申塔がある。創建は享保十五年で、入母屋造りの社殿が二社建立されている。向かって右側が日枝神社、左側が末社の王室神社で、明治十一年と三十五年に修復。創立、修復共同時にされている。例祭には獅子舞が、御屋敷の琴平神社と毎年交互に奉納されている。なお、この獅子舞は、市の文化財に指定されている。

美山通りを西へ、遠谷戸橋を渡ると間もなく西東京バスの折返場があり、通り過ぎた右側の木蔭に「百万遍供養」塔がある。

ここから奥は、砕石場という感じになってしまう。ダンプ通りを奥へ五百メートルほど行くと左に入る道がある。砕石ダンプ通りである。小さな橋を渡ってすぐ右上の山の中腹に、五輪塔と板碑がある。この塔に起源して、古くは「塔の谷戸」と呼ばれ、後に「遠ケ谷戸」となったのではないかと地元の古老は話してくれた。

山入村だった昔の自然、緑の山は、日々変わりつつある。